

南関東・甲信障害者アートサポートセンター 2023年度事業報告書

ART SUPPORT CENTER

南関東・甲信
障害者アートサポートセンター
2023年度事業報告書

厚生労働省 令和5年度障害者芸術文化活動普及支援事業



ART SUPPORT CENTER

南関東・甲信

障害者アートサポートセンター

2023年度事業報告書

厚生労働省 令和5年度障害者芸術文化活動普及支援事業



Contents

| | |
|----------------------------|----|
| はじめに | 03 |
| 障害者芸術文化活動普及支援事業 南関東・甲信ブロック | 04 |
| 南関東・甲信ブロック支援センター | 06 |

Part 1 合同企画展 09

| | |
|---|----|
| 南関東・甲信ブロック合同企画展 2023 | |
| 「カウンターポイント—それぞれの寄り添うかたち—」 | 10 |
| 小林健太郎／佐谷香／都築渉／金澤一摩／ OUTBACK アクターズスクール／高橋朋之／等々力モニカ／ 榎本吉隆／山本実／尾澤佑貴／笠原愁平 | |
| [コラム] 障害者による表現をテーマに3つの展覧会を合同開催 | 23 |

Part 2 研修 25

| | |
|--|----|
| 1. アートを仕事にする福祉現場のアトリエ見学ツアー | 26 |
| 2. サポートブックを起点に支援センターの目的や運営を考える 講師：長津結一郎／宮田智史／櫻井香那 | 28 |
| 3. 教育機関との連携と多様なアートの学びについて考える 講師：こまちだたまお／田中真実 | 30 |
| [コラム] 支援センターを訪れる交流企画 | 34 |

Part 3 意見交換会 35

| | |
|---|----|
| 1. 福祉と芸術に関わる事業で各都県と支援センターは どのように連携しているか？ | 36 |
| 2. 作品の二次利用などに関して支援センターは企業と どのように関わっていくべきか？ | 38 |
| 3. 南関東・甲信ブロックの活動がより良くなるためには？ | 40 |

Part 4 事業評価 41

| | |
|-------------------------|----|
| 評価体制／評価方法 | 42 |
| アンケートとロジックモデル | 43 |
| 評価チームによるコメント 長津結一郎／藤原顕太 | 46 |

| | |
|--------------------|----|
| おわりに | 48 |
| 南関東・甲信ブロック支援センター一覧 | 49 |

はじめに

南関東・甲信ブロックの広域センターを受託して3年目を迎えます。開設当初から、ブロック内で培われてきたネットワークの土壌を活かしそれぞれの知見や強みが発揮され、各支援センターの課題についても相互に助け合いながら、「みんなで考える」ネットワークづくりを目指してきました。

昨年度には、長野県に開設され、ブロック内のすべての都県に支援センターが設置されました。それぞれの地域性や専門性、考え方、予算や人員体制もさまざまですが、どの支援センターもこれまでの基盤を活かして活動に取り組んでいます。そのような支援センター同士の活動を学び合う機会として、今年度もブロック会議や研修を中心に、合同企画展、各都県における事例報告、意見交換会などを実施しました。また、今年度は新型コロナウイルス感染症の5類移行を受けて、オンラインだけでなく対面での会議や交流もかない、これまで以上につながりを意識した年でした。支援センターと自治体の連携も重視しており、自治体担当者による事例報告会を毎年開催しています。今年度は新任の担当者も含めて全自治体が集い、県域を超えて各地の活動を学ぶ機会となりました。

本書では今年度の中心活動を一冊にまとめています。各地で行われている障害のある人の芸術文化活動の発展に寄与し、本事業の支援センターだけでなく、この分野に関わる方々の取り組みの一助になれば幸いです。

障害者芸術文化活動普及支援事業 南関東・甲信ブロック

障害者芸術文化活動普及支援事業では、全国を7ブロックに分け、それぞれに広域センターを設置しています。2023年度、南関東・甲信ブロックのエリアには、埼玉県、東京都、神奈川県、千葉県、山梨県、長野県があり、1都5県に7つの支援センター（埼玉県には基幹型・特色型の2センター）が設置されました。



南関東・甲信ブロック広域センター 南関東・甲信障害者アートサポートセンター

NOTE

南関東・甲信障害者アートサポートセンターの取り組みは、2017年度から実施されている「障害者芸術文化活動普及支援事業」の一環です。当事業は、障害のある人が芸術文化を享受し、多様な芸術文化活動を行えるようになるための事業です。地域における支援体制を全国に展開し、障害のある人の芸術文化活動の振興を図るとともに、自立と社会参加を促進します。都道府県ごとの「障害者芸術文化活動支援センター（支援センター）」、ブロックごとの「障害者芸術文化活動広域支援センター（広域センター）」、全国の「連携事務局」といった支援拠点を設置しています。全国に障害者の芸術文化活動支援の仕組みを整えると同時に支援センター、広域センター、連携事務局のネットワークを構築し、県境を超えて広域でも連携しつつ、地域での振興を図りながら全国規模で推進しています。

埼玉県支援センター（基幹型）
埼玉県障害者芸術文化活動支援センター
アートセンター集

千葉県支援センター
千葉アール・ブリュット
センター うみのもり

神奈川県支援センター
神奈川県障がい者
芸術文化活動支援センター

埼玉県支援センター（特色型）
ART(s) さいほく

東京都支援センター
東京アートサポートセンター
Rights (ライツ)

山梨県支援センター
YAN 山梨アール・ブリュット
ネットワークセンター

長野県支援センター
ザワメキサポートセンター
(長野県障がい者芸術文化活動支援センター)

オンラインから
徐々にリアルへ！

新型コロナが5類に引き下がり 創作や発表、交流機会のさらなる創出へ。



2020年から始まった新型コロナウイルス感染症の広がりによって、重症化リスクを抱える福祉施設ではクラスターが発生するなど、特に障害のある人々の暮らしには大きな影響がありました。対面での活動が難しく、芸術文化活動もまた大きく制限され、創作や発表機会の縮小を余儀なくされる日々が続きました。

2023年5月、新型コロナウイルス感染症が2類相当から5類へと引き下げられ、展示会や舞台公演なども徐々に再開。当ブロックでも新たに、対面とオンラインを活用した会議・研修や各支援センターへの見学・交流企画を実施しました。コロナ禍とともにスタートした南関東・甲信障害者アートサポートセンターですが、支援センターとのさらなる連携を図り、支援力向上に向けて取り組んでいきます。

2023年度の目標

各支援センターにヒアリングした課題と、ニッセイ基礎研究所作成の『全国の障害者による文化芸術活動の実態把握に資する基礎調査報告書（令和2年度・令和3年度）』を参考に、下記の通り2023年度の南関東・甲信ブロックの目標を設定しました。

1 支援センターの支援力の向上

主体的に対話し、学び合うことで各支援センターの支援力向上を目指す。

専門外の分野を強化したい
(美術、福祉、舞台芸術)

2 ブロック内連携と相互フォロー体制の構築

連携を促進し、相互フォローしながら「みんなで考える」体制を構築する。

中間支援組織としての
役割とは…

3 鑑賞・発表機会の拡充

合同企画展の開催や、各支援センターとの意見交換を通じて発表の場について考える。

発表の場
あり方について考える

4 支援センター認知度の向上

情報を必要とする人に向けた最適な発信手段を検討する。

十分な広報活動
行えていない

5 基本計画未策定の自治体に向けた働きかけ

自治体と協働し、地域や分野を横断した事業の推進を目指す。

都県内全域で
ネットワークを拡充したい

2023年度の事業内容

- 1 支援センターへのヒアリング
- 2 ブロック会議
- 3 各都県における事例報告・意見交換会
- 4 研修
- 5 合同企画展
- 6 情報収集・発信
- 7 事業評価への取り組み
- 8 報告書の作成

■ 南関東・甲信ブロック支援センター

南関東・甲信ブロックで活動する、6つの支援センターを紹介します。
埼玉県支援センター（基幹型）は p.8 に掲載。
またそれぞれのお問い合わせ先は p.49 をご参照ください。

埼玉県支援センター（特色型）

ART(s)さいほく

2019年に埼玉県で二つ目の支援センターとして活動をスタートし、県北部・西部地域の障害のある人たちの芸術や表現活動のサポートを行っています。「地域とつながる」ことをテーマの一つとして、街の文化財を活用した作品展などを地域の人や団体と協働しながら実施。また相談支援事業所との連携により、在宅で創作活動を行う人たちの作品の発掘やサポートにも力を入れています。作者への丁寧なサポートの充実や地域との連携を目指します。

町や地域の事業所の職員も協働して展覧会を企画するなど、地元の地域を中心に活動しています。市町村ならではの地元の情報から作家につながることもあり、2023年度も小川町立図書館にて展覧会「アートセッションズ in さいほく2023」を開催しました。



千葉県支援センター

千葉アール・ブリュットセンター うみのもり

千葉県を中心に「人材育成講座の開催」「美術、舞台分野の相談受付」「ネットワークの構築」「展示・発表の機会の創出」「情報収集・発信」に取り組んでいます。芸術文化活動を支援する人の技術習得の場の確保、また表現者の体験を提案し、展示や発表の機会を設けています。「うみのもり」という名称には、芸術文化を通して多種多様な生きものを養い、海そのものの水質をも浄化する「藻場」のような場所でありたいという思いが込められています。

2023年度の展覧会は新たに会場を移し、千葉県立美術館で開催。展覧会の規模を拡大し、普及促進を図りました。



東京都支援センター

東京アートサポートセンター Rights（ライツ）

障害のある方々が生み出す美術・身体表現・音楽などの創作やそれらを取り巻く環境の充実を目指して、さまざまな視点から障害のある方の表現について考え、その表現を通じて創作環境の理解や知識の拡充につなげるプロジェクトを展開しています。専門家との連携やネットワークを活かした相談支援に取り組むとともに、障害者と地域の人たちがつながる機会をつくるため、多分野で活躍する地域の人々と一緒に活動しています。

2023年度は江東区の文化施設「ティアラこうとう」からの相談をきっかけに、同施設と共催し、身体表現のワークショップとファシリテーター育成研修を実施（全8回）。障害の有無にかかわらず個々の自由な表現を育むとともに、個々が持つ表現を引き出すためのファシリテーションを学ぶ機会となりました。



撮影：たかはしじゅんいち

神奈川県支援センター

神奈川県障がい者芸術文化活動支援センター

2020年度に開設。障害のある人の芸術文化活動に関する相談対応や、活動を支えるネットワークを構築する「つなぐ」、芸術家によるワークショップや展覧会などの実施を通して、体験や発表の機会を創出する「つくる」、障害のある人の芸術文化活動を支援するコーディネーターを育成する「支える」の3つを柱に活動を展開しています。障害のある人が身近な地域で芸術文化に触れられるよう、障害福祉・芸術文化のネットワーク構築を目指しています。

福祉施設でのワークショップを実施。さらにワークショップの成果報告という形でシンポジウムを開き、発表機会としています。2022年度には県内でアート活動を行う福祉施設と地域の文化施設を掲載した『いっしょにたのしみおさんぽマップ』を発行しました。



撮影：金子愛帆

山梨県支援センター

YAN 山梨アール・ブリュットネットワークセンター

2016年度より活動し、障害のある人の芸術活動に関する相談を受け付け、また県の地理的条件を超えた連携、施設間やアート活動を行う支援者、支援団体との交流を通して障害者の芸術活動支援を進めています。特徴は寄せられた相談をもとに事業所などを訪問し、助言や情報提供、アート体験ワークショップを行うアートカフェミーティングを実施していること。相談者のニーズに寄り添うことで一軒一軒との関わりも深まりネットワークの構築にもつながっています。2022年度以降は鑑賞支援にも注力し、文化施設での視覚障害のある方との美術鑑賞ワークショップやバリアフリー映画上映会にも取り組んでいます。



長野県支援センター

ザワメキサポートセンター（長野県障がい者芸術文化活動支援センター）

障害のある人が創作や発表機会を通じた交流など多様な芸術文化活動を行うことを目指し、2022年にスタート。2016年から開催している「ザワメキアート展」を継続して開催するとともに、作品の販売や著作権などに関する相談支援、芸術文化活動に関する研修などを行い、障害のある人やその支援をされる人を幅広くサポートしています。

支援センター設置後は、多分野のゲストキュレーターを迎えて、「ザワメキアート展」を開催しています。2023年度は考古学研究者の堤隆氏のキュレーションによる「ザワメキアート展2023 Roots of Arts」を開催しました。



■ 南関東・甲信ブロック広域センター 実施団体

広域センター

南関東・甲信障害者アートサポートセンター

各支援センターが協働し、相互フォローしながら「みんなで考える」体制をつくる。

障害者芸術文化活動普及支援事業で定められた南関東・甲信ブロックではこれまで、2020年度まで東京都と埼玉県の2団体が広域センターを担い、首都圏の豊富な芸術文化資源やネットワークを活かした事業を実施しました。新たな支援センターの設置や、自治体の基本計画策定も進み、ブロック全体の支援力向上に寄与しました。2021年度からはみぬま福祉会が採択され、今後もさらにブロック内の各支援センターが力をつけていくために、当センターでは各支援センターが主体的に参加できる事業を実施しています。それぞれの知見や強みが発揮され、課題はお互いに補うことができる「みんなで考える」ネットワークづくりを目指しています。

埼玉県支援センター（基幹型）

埼玉県障害者芸術文化活動支援センター アートセンター集

障害のある人のアートの意義を県内に普及させ、魅力を伝え広げていく。

埼玉県では、2009年から福祉部障害者福祉推進課による「障害者アートフェスティバル」を実行委員会形式で毎年開催し、作品展やダンス公演、バリアフリーコンサートなどの事業が実施されています。行政が主体となり福祉、美術、教育などの機関が協働しながら、障害のある人たちのさまざまな表現を社会に発信してきました。またその一環で始まった「埼玉県障害者アート企画展」に加えて、「障害がある方の表現活動状況調査」もスタート。県内から集められた調査票から出展作品を選ぶという方法も生まれました。これらの事業にみぬま福祉会が継続的に携わってきた経緯をふまえ、2016年には本助成を受け「埼玉県障害者芸術文化活動支援センター アートセンター集」を設立。官民の連携が強化されました。ネットワークの醸成により、表現活動を始めの人や展覧会運営に携わる人、作品を楽しむ人たちが増えるなど、県内の障害のある人の支援は多様な形で広がっています。

実施団体

社会福祉法人みぬま福祉会

働くことを権利とし、どんな障害があっても、受け入れる施設。

みぬま福祉会は、1984年に、重い障害を理由に学校卒業後の進路がない人たちのために「どんな障害がある人でも受け入れる」という理念を掲げて発足。「困難や例外的な状況にある人を切り捨てない」ことを大切に、さまざまな困難を抱えた人を受け入れています。現在は埼玉県南部を中心に通所・入所相談支援事業など22の事業を展開、利用者は300人を超えています。

●工房集プロジェクト

障害のある人の「表現活動」を社会につなぎ、新しい価値を創造する。

労働は権利と考えて活動の主軸にし、「仕事に人を合わせるのではなく、一人ひとりに合わせた仕事をする」ことを大切にしてきました。当初は利用者が関わられる軽作業（ウエスづくりや缶プレスなど）を行っていましたが、その作業に合わない人がいたことをきっかけに、利用者一人ひとりの想いに寄り添ったことで始まったのが「表現活動」でした。

しだいにほかの利用者にも表現活動が広がったため、みぬま福祉会の表現プロジェクトを社会につなげる活動拠点として、2002年に工房集を開設。「利用する人だけの施設としてではなく、新しい社会・歴史的価値観をつくるためにいろんな人が集まっていこう、そんな外に開かれた場所にしていこう」という想いを込めて「集（しゅう）」と名付け、アトリエ、ギャラリー、ショップ、カフェを備えました。設立時から、アートディレクター、デザイナーなど多分野の専門家と協働して、プロジェクトを展開し、現在は法人全体で11のアトリエを中心に150名ほどが、さまざまな表現を生み出しています。



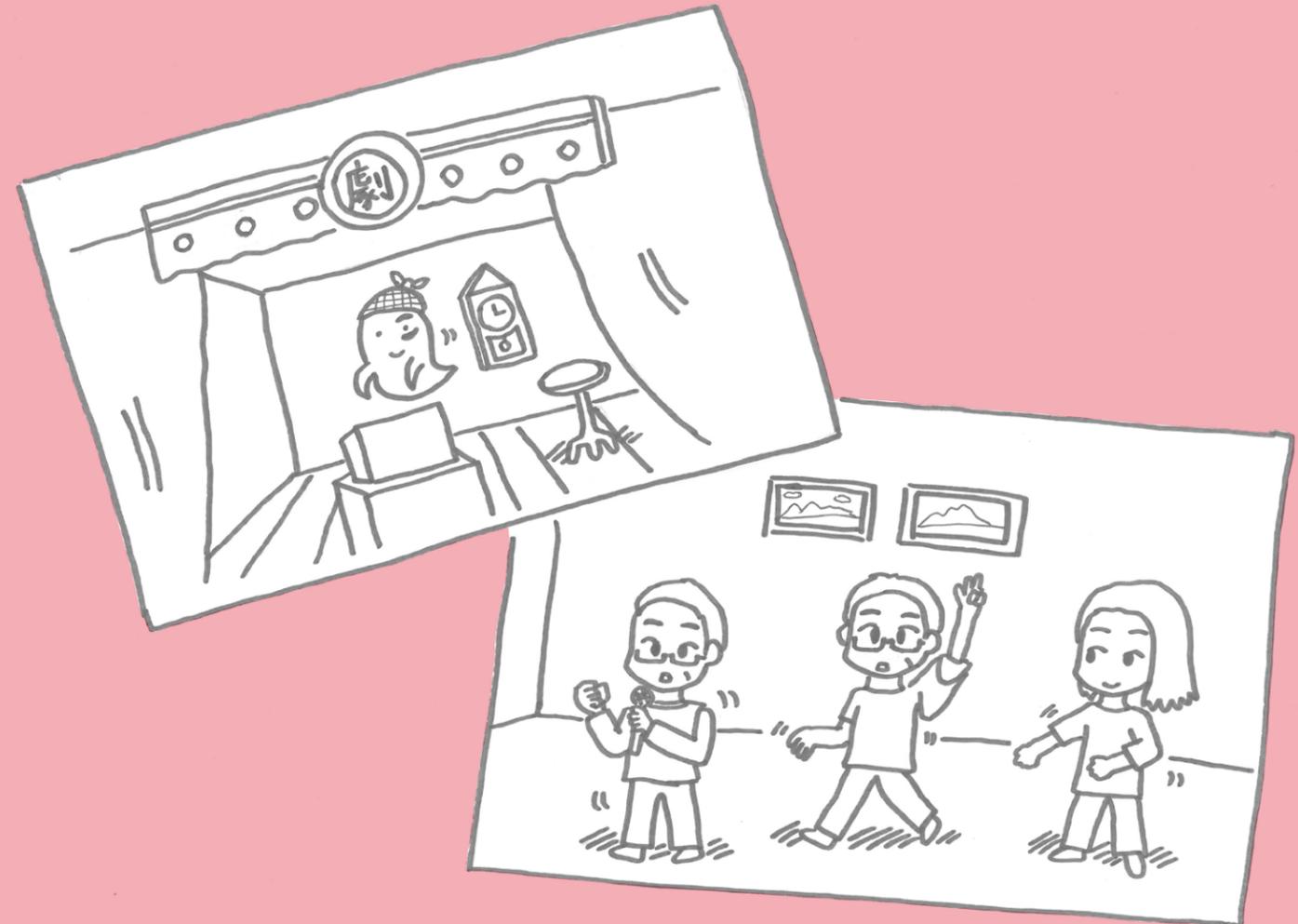
Part 1

EXHIBITION

合同企画展

本事業の普及を目指し、ブロック内の支援センターと合同企画展を開催。展覧会のテーマは前回から継続し、出展が2年目となる作家や新しい作家など多様な顔ぶれとなりました。また、今回は「第14回埼玉県障害者アート企画展」と「アートミーティング at さいたま国際芸術祭」との合同開催という新たな試みも行っています。

※作家の創作背景や支援者とのつながりについて、本書に記載しきれなかった内容を当センターのウェブサイトで紹介しています。



南関東・甲信ブロック合同企画展 2023

カウンターポイント

—それぞれの寄り添うかたち—



開催概要

- 展覧会名:** 南関東・甲信ブロック合同企画展 2023
「カウンターポイント—それぞれの寄り添うかたち—」
- 開催日時:** 2023年11月29日(水)～12月3日(日) 10:00～17:00
※最終入場 16:30
- 会場:** 埼玉県立近代美術館 一般展示室4 (地下1階)
- 入場料:** 無料
- 主催:** 南関東・甲信障害者アートサポートセンター、社会福祉法人みぬま福祉会
- 協力:** 東京アートサポートセンター Rights (ライツ)、神奈川県障がい者芸術文化活動支援センター、千葉県アート・ブリュットセンター うみのもり、YAN 山梨アート・ブリュットネットワークセンター、埼玉県障害者芸術文化活動支援センター アートセンター集、ART(s) さいほく、ザワメキサポートセンター (長野県障がい者芸術文化活動支援センター)、まあるい広場、OUTBACK アクターズスクール
- 助成:** 令和5年度障害者芸術文化活動普及支援事業 (厚生労働省)
- アドバイザー:** 中津川浩章 (美術家、アートディレクター)



関連イベント

- イベント名:** パフォーマンス実演
- 開催日時:** 12月3日(日) 14:00～
- 内容:** OUTBACK アクターズスクールの演劇パフォーマンス、金澤一摩さんによる人形劇を実演。

開催内容

本展は障害者芸術文化活動普及支援事業 (厚生労働省) により、東京都、神奈川県、埼玉県、千葉県、長野県、山梨県に設置されている障害者芸術文化活動支援センターの合同によるものです。10年にわたり活動を深めている支援センターから2年目の支援センターまで、地域性や継続年数は異なりますが、各支援センターはそれぞれの地域と人に寄り添い、ネットワークを構築しながら障害のある人の芸術文化活動を支援しています。

本展では、2022年度、東京芸術劇場で実施した展

覧会を踏襲し、一部、新たな作家を迎えました。「寄り添うかたち」をテーマに障害のある人の絵画、立体作品、演劇や人形劇などのジャンルを超えた多彩な表現と商品化などのプロジェクトに加えて、各支援センターと作家、施設、支援者との関係性をご紹介します。一人ひとりの体験をもとに構成された演劇、鳥瞰写真を再現した立体富士など。展覧会を通して表現することと生きることの密接なつながり、そして支援者との関わりによる各地での芸術文化活動の広がりについて考えました。

..... \ Topics / 「カウンターポイント」とは

音楽技法の一つである「カウンターポイント」。日本語では「対位法」と呼ばれますが、複数の異なる旋律(メロディ)がそれぞれの独立性を保ったまま互いに調和しながら重なり合う技法のことです。本展では作品と合わせて、地域性など背景の異なる各都県の支援センターそれぞれの「寄り添うかたち」を紹介し、支援センター同士の協業を重なり合うメロディ「カウンターポイント」になぞらえています。本展「カウンターポイント」は、昨年から続き2度目の開催。開催地を変えて継続することで当ブロックの特色の一つとして発信しています。

♠ Artist

小林健太郎

こばやし・けんたろう

YAN 山梨アール・ブリュット
ネットワークセンター



ポップづくりを仕事としていた母親の影響もあり、幼い頃から絵が得意だった。4歳頃には1日に10枚ほどを描くようになる。8歳頃には、母親と祖母が描きためた作品を活用したグッズの制作を開始。健太郎さんが社長、母親と祖母が社員という設定の「Kentarou-Art」という会社名で販売を始める。作品だけでなく障害のことも知ってほしいという母親の想いから、手づくりの「障害ってなあに？」というリーフレットを添えている。

10歳頃には1日に3時間以上も絵を描くように。その頃、SNSで大阪の万博記念公園にある岡本太郎の「太陽の塔」を知って興味をもち、家族旅行で実物を見た後から作風が変化した。以降「太陽の塔」が作品に多く登場している。好きな洋画やアニメ、ディズニーのパレードなどの動画からインスピレーションを受けた作品も多く、エネルギーに満ちあふれている。2019年、中学1年生のときに内閣府「障害者週間のポスター」で内閣総理大臣賞を受賞し、2020年には次世代甲府大使に選任された。本展では作品に加えて、「Kentarou-Art」の商品の数々も紹介。



左上：〈集合写真〉／左中：〈メディア〉／左下：〈仮装パーティー〉
右：作品のほか、冊子『障害ってなあに?』や制作した衣装なども展示

♣ Support

YAN山梨アール・ブリュットネットワークセンター

Yamanashi

……「Kentarou-Art」と共に歩み、新しい景色を見てきた8年間

きっかけは1枚の「お絵描き」

8年前、YAN 山梨アール・ブリュットネットワークセンター（以下、YAN）が開催したワークショップに参加した健太郎さんが1枚の紙にさらさらと絵を描いたのを見て、その線の美しさに驚いた。母親の美奈さんは絵から型紙をおこし、ステンシルプリントしたバッグを制作。バッグに障害についてまとめた冊子「障害ってなあに?」を添えたのは、自閉症や発達障害という「見えにくい障害」を知ってほしいという思いからだ。当時より山梨県内でそのような活動がされている当事者家族はいなかったため、YANが支援センターとして伴走するなかで健太郎さんとご家族に多くのことを学ばせてもらった。

目標は「日常に溶け込むアート」

「アートを日常に溶け込ませたい」と語る美奈さんが現在考えているのは、車椅子のホイールカバーにアート作品を活用すること。既製品ではキャラクターを使用したものが多いが、アート作品を活用することでより多くの人の目に留まり、邪魔者扱いされがちな車椅子がもっと楽しいものになってほしいと話す。そのほかにもラッピングバスや自動販売機など、日常のなかで作品の利活用が広がることを願っている。



小林健太郎



数年ぶりの原画展示をサポート

これまでYAN主催の展覧会ではグッズの紹介が多く、原画作品を展示する機会はほとんどなかった。そんななか、今回の合同企画展では健太郎さんの原画作品を展示できることになり、YANの方では健太郎さん親子と並走しながら、作品の選定や展示プランの検討など展示準備をサポートしている。展示プランを提案する際は、健太郎さん本人に直接説明をして同意を得るなど、必ず作家本人との対話を大切にしている。



From Staff

支援センタースタッフより

きらきらときらめく大事なことを一瞬たりとも逃さないように、タブレットから流れる音と映像を几帳面に確認する健太郎さん。彼は9月末に少し早いクリスマスモードに突入。卓上のカラフルなペンを握り、紙いっばいにこれからの楽しいことや日々の出来事が描かれていきます。彼のきんとしたあり方やきらきらした色や線にいつも魅了されています。

♣ Artist

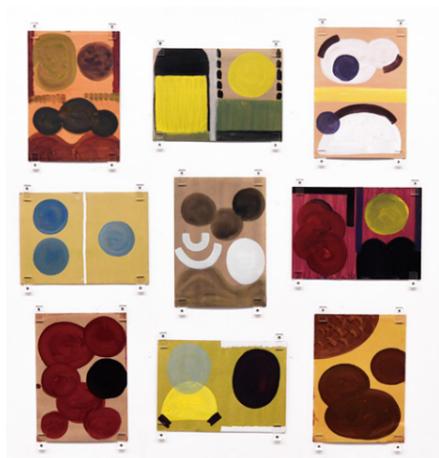
さや・かおり

佐谷香

東京アートサポートセンター Rights (ライツ)

数年前、入院中に絵を描きたいと思い、売店で購入したメモにボールペンで線画を描き始める。その後、作業療法により絵の具などを使用した制作に取り組む。段ボールに描いた作品は入院中に描いたものだ。アクリルと水彩絵の具を使い、絵の具を重ね合わせて感じるままに筆を走らせることもあれば、思い浮かぶ風景を描くこともあり、作品には水平線がよく登場している。風景、自然に加えて国旗やトーテムポールにも関心があるようだ。

また貝殻や木の実、押し花やアンティークの収集を好み、画材への探求心も強い。これまでさまざまな素材を用いており、100円ショップで購入したまな板に描いた作品は150点にのぼる。段ボールや木などの経年変化が異なるところも魅力だという。本展で紹介する作品のほかにも蛍光マーカーを使用した作品や箱型の立体作品などもある。発表機会を模索していたところ、通院先で東京アートサポートセンターRights (以下、ライツ) を知り、以後ライツの企画への参加や公募展の情報を得るなど交流を深めている。



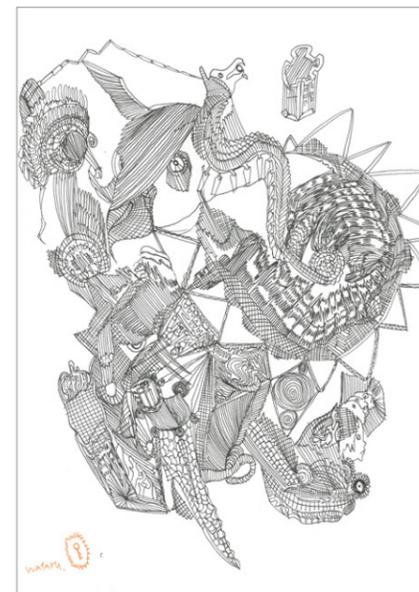
上:《(totem)》/下:《(symbol)》

つづき・わたる

都築渉

東京アートサポートセンター Rights (ライツ)

2022年頃から自宅で制作を始める。きっかけは白い紙に浮かび上がるように見える「模様」だった。白い紙と対峙しながらその模様をボールペンでなぞり、細かな線で用紙が埋め尽くされた。描き続けるうちにモチーフのイメージが膨らみ、最近では家族や猫などを描いている。外出した後などに作品のイメージが思い浮かぶことが多く、数時間で描き終えることもあれば数日に分けて完成することもある。自室で音楽を聴きながら制作する姿は家族にも見せないが、完成した作品は家族との大切なコミュニケーションの一部になっている。今までに50点ほどの作品があり、自宅には額装した作品を飾り、お世話になった方に家族がプレゼントすることも。通院先で家族が表現活動について相談したことがきっかけでライツとつながる。



上:《太陽と顔》/下:《赤と黒》

♣ Support



東京アートサポートセンター Rights (ライツ)

× 佐谷香・都築渉

from Staff

支援センタースタッフより

豊富な情報を相談者に提供する体制づくり

ニーズに応じた相談対応

ライツでは、寄せられるさまざまな相談に対し電話、メール、FAX、ウェブサイトにある問い合わせフォームで受け付けており、相談者の希望によってはオンライン会議ツールの使用や対面でのお話の機会を設けている。当事者やその家族、支援者から「活動を充実させたい」「作品の利用に関する契約について知りたい」などの相談を受け、ヒアリングをしながら相談者のニーズに合わせた対応を心がけている。相談者へは個別の情報提供や、活動状況の聞き取りなどを継続的に行っており、これまでの相談が新たな企画につながる場合もある。



相談対応のほか権利にまつわる冊子の提供や無料法律相談を実施している



相談会やハンドブックなど多様な手法

特徴的な活動として、権利保護に関する無料法律相談にて障害者の芸術文化活動にまつわる法的な事柄について、ライツの専門アドバイザーを務める、著作権に詳しい弁護士が直接相談に応じる機会を年数回設けている。2016年度には過去3年間に相談窓口で寄せられた権利関係に関する相談内容をとりまとめた弁護士監修のハンドブックを発行し、関係先や都内外の福祉事業所、自治体のほか、希望する個人の方へ無料で配布している。

ウェブサイトで情報発信

活動場所や発表の機会についての相談が多いことから、それらの情報を気軽に得られるよう、ウェブサイト内に専用ページを開設している。都内で芸術活動を主宰する団体や公募展の情報、作家登録システム等の案内を掲載。活動場所については、美術、身体表現分野のアトリエやサークル活動についてエリアごとに紹介するほか、芸術活動や鑑賞支援を行う都内の施設や団体などを訪問し、レポート記事にするなど随時、情報を更新している。

東京都では、創作活動をしている施設や団体が多くあり、独自に展覧会を行っているところも少なくありません。そのような活動が地域の方々につながり、知る機会をつくることで、誰もが暮らしやすい社会を目指しています。今年度は身体表現やコミュニティの場づくりに力を入れ活動しました。

♣ Artist

かなざわ・かずま

金澤一摩

ART(s)さいほく



ステージ横に展示した絵コンテ



「ピノキオ」に影響を受け、4歳頃から人形づくりを始める。自分も人形に命を吹き込みたいと思っていたが、人形に命は宿らないと知り、一時は制作をやめていた。その後、NHKで放映された「クインテット」や「ひょっこりひょうたん島」と出会い、登場するキャラクターの人形づくりに目覚める。なかでも「ひょっこりひょうたん島」のキャラクターは、公演や展示などに足を運び、実物の人形から研究を重ねた。高校時代には自身が考えた物語に登場するキャラクターをつくり始めるようになる。

教員に人形劇の構想を相談したことがきっかけで

「ART(s)さいほく」とつながり、2020年に「アートセッションin本庄」に出展。人形制作に加えて脚本、演出などのすべてを手掛けた『おばけのゴストント』を上演し、同級生や展覧会スタッフのサポートを得て成功を収めた。社会人になった現在も意欲的に制作しており、芸能人や映画のキャラクターなどとモチーフも多岐にわたる。すべての人形に図面はなく、キャラクター原画を参考に造形し、操作の仕掛けを加えている。本展では2020年に初演した『おばけのゴストント』に手を加えた第2弾を紹介。



埼玉県の2つの支援センター（特色型・基幹型）のスタッフが人形劇の公演をサポートした

♣ Support

Saitama [特色型] 埼玉県支援センター

ART(s)さいほく × 金澤一摩

…… 地域との協働による発表機会の創出

特別支援学校との連携

「ART(s)さいほく」の運営団体である社会福祉法人昂では相談支援事業を行っており、地域の特別支援学校とも連携して障害のある人の暮らしや仕事のサポートを行う。2019年に特別支援学校高等部の教員から人形を制作している学生がいると情報を得て、作品調査のため学校を訪問。集められた作品のことや、制作について本人から話を伺い、夢は人形劇の公演だと知る。

個展開催に向けて

合同企画展に訪れたスタッフの知人が作品に感銘を受け、自身が運営するギャラリーで個展を開催したいと相談を受ける。これまでの展覧会の記録や公演の様子を伝え、オーナーと企画を検討して金澤さんに提案した。南関東・甲信ブロック合同企画展で紹介した新作の舞台セットを中心に、これまでの制作した人形やコンテ、台本、ドローイングも展示した。

出展と人形劇の公演に向けて

同年に、主催の展覧会「アートセッションin本庄」の出展を依頼。本人や家族と打ち合わせを重ね、教員とも進捗を共有しながら準備を進めた。2020年には主催の展覧会への出展と人形劇の公演を企画し、開催に向けて伴走を重ねる。人形劇の公演は成功を収めた。2023年には南関東・甲信ブロック合同企画展に出展し、新作「ガイコツの一日」の舞台セットと人形、動画を展示。

個展での人形劇の公演

初めての個展開催に向け、展示、広報物の制作やSNSでの発信に加えて、開催にあたり「ART(s)さいほく」のスタッフも舞台の撮影や音響サポートなどの協力を行った。会期中は地域に暮らす子どもから大人までの来場があり、テレビの取材も受け、大好きな芸人との交流も実現した。ギャラリーオーナーも金澤さんとともに舞台に上がり、人形操作を行うなど人形劇は好評を博した。



From Staff

支援センタースタッフより

「自分の夢」の実現に向け、彼の思いの強さや熱意をビシビシ感じました。その夢のお手伝いに関われることは支援センターとしてとても嬉しいことでした。周囲の人の理解や協力も得ながら夢の実現に近づいていける支援をしていきたいと考えています。

Saitama [基幹型] 埼玉県支援センター

アートセンター集

…… ネットワークを活かした官民協働による展覧会

みんなでつくる展覧会

2009年、埼玉県による埼玉県障害者アートフェスティバルの一環として、「障害のある方の表現活動状況調査（以下、調査票）」が始まり、調査票をもとにした選考を経て「埼玉県障害者アート企画展（以下、展覧会）」が開催される。2016年より「アートセンター集」が運営する「埼玉県障害者アートネットワークTAMAP±O（タマップ・プラマイゼロ）」が発足。展覧会の事務局を担い企画・運営を継続している。選考会では、行政、美術、福祉、それぞれの視点での対話を大切に、交ざり合う価値観のなかから選ばれた作品を展覧会で紹介。発表機会の創出に加えて、作家を取り巻く支援者の人材育成を主眼に置き、表現活動を通じて関わる福祉施設職員の支援力の向上を目指している。

施設に所属していない人へのサポート

「アートセンター集」には施設に所属していない人からの表現活動に関する相談が増加傾向にある。また、展覧会を通じてそのような作家と関わる機会も多い。施設に所属していれば作品制作や発表機会などの支援を得られるが、所属していない場合は活動への課題が多い。作家によっては定期的に連絡を取り合うなど、展覧会終了後も関係性を継続している。

埼玉県障害者アートネットワーク

TAMAP±O（タマップ・プラマイゼロ）行政、美術・教育の専門家、弁護士などと30団体に及ぶ福祉施設によるネットワーク。障害のある人たちの表現の魅力や支援のあり方を、毎月の会議や研修を通して学び合い、視座を高めている。また、対話を重ねながら多様な視点を取り入れ、みんなで展覧会をつくり上げるプロセスを「埼玉方式」として発信している。



From Staff

支援センタースタッフより

埼玉県が取り組んできた障害のある人の芸術文化事業を礎に活動するなかで多くの課題に気づきました。特に施設に所属していない人については支援の重要性を感じています。官民協働での企画展の継続に加えて、当センターが運営を担うネットワークの参加団体や専門家とも連携しながら、今後も支援を広げたいと考えています。

♣ Artist

OUTBACK アクターズ スクール

神奈川県障がい者
芸術文化活動支援センター

2021年に開校以来、プロの俳優を講師に招いてワークショップを積み重ね、精神疾患当事者が自分たちの経験をオリジナルの劇にして、自分たちの言葉、声、体を通して発信している演劇学校。2023年12月23、24日の第3回主催公演では、超満員札止めの成功を収める。本展では、第2回主催公演に向けて行われたワークショップの様子を写真で紹介し、劇とラップで構成された作品「愛と変容についてのラップバトル」のラップシーンの一部を実演した。

OUTBACK プロジェクト

OUTBACK プロジェクトは、横浜で精神疾患のある人たちの支援に関わってきたメンバーが中心となり、2021年に立ち上げた。日々の活動のなかで、この社会が精神疾患当事者に誤ったイメージ(偏見)を抱いていることを痛感し、当事者の声を社会に向けて発信していく必要性を痛感したためだ。メンタルヘルスの不調に悩む人たちが、自分たちの経験をオリジナルの劇にして、自らの言葉、声、体を通して発信していく「OUTBACK アクターズスクール」(演劇学校)を活動の核とし、講演会や出版、YouTubeでの動画配信などさまざまなメディアでの普及啓発活動や、当事者のエンパワメントにつながる活動も行っている。

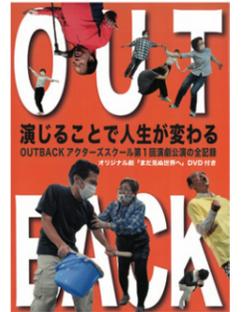


OUTBACK アクターズスクール校長
中村マミコさん

“一つの劇をつくるまで、さまざまなワークショップを通じてメンバーが互いを理解し受け止め合うことで、自分自身を表現できる「劇」をみんなでつくり上げています。”



当日のパフォーマンスは
YouTubeで公開中!



「演じることで人生が変わる
OUTBACK アクターズスクール
第1回演劇公演の全記録オリジナル劇『まだ見ぬ世界へ』DVD付き」2022年/編集:佐藤光展/発行:OUTBACKプロジェクト

左から1〜2枚目は本展でのパフォーマンス、3枚目は本展の展示風景、4枚目は主催公演に向けた練習(2022年10月実施)の様子



♣ Support

神奈川県障がい者芸術文化活動支援センター

…… 舞台芸術分野と中間支援組織の専門性を活かした連携

福祉と芸術文化の関わりを考える場づくり

神奈川県障がい者芸術文化活動支援センターの運営団体である認定NPO法人STスポット横浜は小劇場「STスポット」の運営、学校や福祉施設への芸術家派遣、地域のアートプロジェクト支援などを行う。2015年度からは、文化庁委託事業や神奈川県との協働を通して、福祉と芸術文化の関わりについて考える場をつくり続けてきた。

アーティストによるワークショップ実施

2016~2018年度に、横浜市神奈川区にある精神障害者の通所施設「地域活動支援センターひふみ(以下、ひふみ)」にて、芸術家による造形や音楽などのワークショップを行った。芸術文化活動が、福祉施設が地域との関わりを持ったり、同じ障害のある仲間と楽しみを共有したりするきっかけとなっていた。

OUTBACK アクターズスクール

OUTBACK アクターズスクール発足

「ひふみ」に勤めていた支援員が後にOUTBACK アクターズスクールをスタート。神奈川県精神医療人権センターに関わる当事者を中心に構成され、精神障害のある当事者の声を演劇などの芸術文化活動を通して社会に向けて発信している。



活動の広まりに向けて協力

OUTBACK アクターズスクールのように、当事者が主体的に関わり、自分たちの表現を発信する取り組みはまだ多くない。同じく精神障害のある当事者や、その支援者などから芸術文化活動に関する相談があった場合には、先進事例として紹介し、こうした活動の広まりに協力して行く。

From Staff

支援センタースタッフより

OUTBACK アクターズスクールの演劇は、自分自身と、同じ舞台に立つ仲間と、そして社会と向き合いながらできていることが伝わってきます。神奈川県内にはほかにもさまざまな表現、そして表現を通した出会いと対話が生まれています。各地域での取り組みを顕在化しつつなことで、芸術文化に触れたり表現する場がより豊かに広がることを目指しています。

♣ Artist

たかはし・ともゆき

高橋朋之

千葉アール・ブリュットセンターうみのもり

高校卒業後よりまあい広場に通所。ペン、クレヨン、墨といったさまざまな画材を使用し、身のまわりにあるものや植物、動物、楽譜などを描く。モチーフは職員が提案するほか本人と相談することも多い。職員と一緒にインターネットの画像や図鑑などを見ながら描くことが多く、コミュニケーションの一つとなっている。



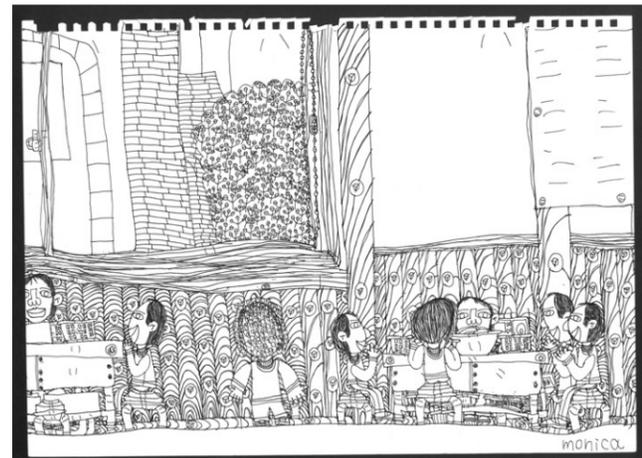
〈せかいのどうぶつ〉

とどりき・もにか

等々力モニカ

千葉アール・ブリュットセンターうみのもり

まあい広場に所属。幼い頃から絵を描くことが好きで、自宅での様子や遠足などの記憶をもとに描き、本人もたびたび登場する。言葉は多くないが、職員が図鑑や雑誌をもとにモチーフを提案することも。0.3~0.5mmの水彩ペンを用いて集中して描き、作品の進み具合や描き込みの状況を見て、本人が興味あるモチーフかどうか分かる。



〈ひろばの作業〉

♣ Support

千葉アール・ブリュットセンターうみのもり

…… 千葉県でのネットワーク拡充を目指し、文化の素地を育むアートな場づくり

つながりをネットワークに

2019年度から千葉アール・ブリュットセンターうみのもり（以下、うみのもり）が開設され、県内にある4つの団体を中心に県内のネットワークを構築。これまで交流のある団体と連携しながら芸術文化活動の普及に向けて活動している。なかでも「まあい広場」は長年関わりがあり、情報共有や人材の紹介などを行う。

専門性を活かしたワークショップの開催

うみのもりでは、運営団体の「たまあーと創作工房（以下、たまあーと）」で培ってきた表現の場づくりの専門性を活かし、音楽、詩、身体表現などの多分野でワークショップを展開。福祉施設から画材の使用法やアート活動に関する相談を受けることが多く、「たまあーと」の講師が出張してワークショップを実施するなど、きめ細かな対応を行っている。

ますもと・よしただ

梶本吉隆

千葉アール・ブリュットセンターうみのもり

まあい広場で20年以上、絵を描いてきた。当初は動物を描いた具象的な作品だったが、近年ではクレヨンを塗り重ねた作品を描くようになった。床に画用紙やキャンバス、かたわらに画材が入る段ボール箱を置きしゃがみ込んで描く。土を掘るのも好きで、その感触が絵に反映される。作品にはテーマがあり、本人の体験をもとに描かれていることが多い。



〈うみ〉

やまもと・みのる

山本実

千葉アール・ブリュットセンターうみのもり

たまあーと創作工房に小学1年から20年以上通う。3~4年の周期で題材が変化し、過去には電車の絵画や安土桃山城の立体作品を制作。7年前より新聞紙や薄紙を使用して縮小させた富士山の立体を制作。週1日、仕事のあとに造形教室に通い、作品をつくる。祖父と富士山に登山したことが制作に影響しているよう。



〈富士山〉

高橋朋之・等々力モニカ・梶本吉隆・山本実

Project Memo

まあい広場

——一人ひとりの役割を活かしたぬくもりの手仕事

障害のある子どものお母さんたちとボランティアで行っていた遊びのサークルが基盤となり、1994年に千葉市美浜区で開所。2006年に移転。一人の作品が画廊に展示されたことを機にアート活動にも取り組む。一人ひとりが大切にされる社会を目指す。和紙制作から始まった手仕事は手織り、刺繍、染め物、縫製などに広がっている。

Project Memo

たまあーと創作工房

——未来に続くアートのたねまき

1998年にスタート。アートを通じて得られる根源的な「楽しい」「嬉しい」「発見する喜び」を経験できる場づくりに取り組む。障害の有無にかかわらず、子どもの美術造形教室だけでなく、大人の絵画教室も開講しており、受講生は150名を超える。また出張授業で保育園や小中学校などでもアートを通じて共育活動を行っている。

From Staff

支援センタースタッフより

まあい広場の運営母体、社会福祉法人九十九会は50年前から障害者福祉に取り組んでいます。山本実さんも幼少期に九十九会を利用していました。たまあーとでは、「アート」は社会のなかに組み込まれていてこそ「アート」という思いからとり着いた活動が「共育」でした。

♠ Artist

おざわ・ゆうき

尾澤佑貴

ザワメキサポートセンター

小学3年生のときから24分の1スケールの旧車を制作。フリーハンドで切り出した段ボールのパーツをグルーガンで貼り合わせてつくる。その細部まで再現された車を尾澤さんは大切にし、壊れたら修理する。修理が不可能になれば廃車とし、そのパーツはほかの車に使ったりもする。車の歴史・構造などを熟知して制作している。



〈スバル 360〉

かさばら・しゅうへい

笠原愁平

ザワメキサポートセンター

手のひらサイズのこの小さな生き物たちは、笠原さんが小学生の頃の作品だ。幼い頃から絵を描いたり創作したりすることが大好きで、当時は自宅でも学校でも創作していた。動物、鳥、虫、魚、恐竜など、手のひらサイズの小さな生き物たちを、図鑑を見ながら細部まで気を配ってつくっていた。納得がいくものができ上がると、宝物のように大切に、自宅の部屋は作品であふれていたという。

〈どうぶつ〉



♣ Support

Nagano



ザワメキサポートセンター

（長野県障がい者芸術文化活動支援センター）

尾澤佑貴・笠原愁平

From Staff

支援センタースタッフより

…… 公募展の継続と幅広いサポートに向けて

作品の向こう側にある「モノガタリ」を見つける

2016～2019年に長野県、長野県教育委員会、ザワメキアート展実行委員会主催で開催された公募展「ザワメキアート展～信州の障がいのある人の表現とアール・ブリュット～」では、応募の中から毎年20名を展覧会で紹介。実行委員などが作家の取材に行き、作品の背景にある制作の様子、本人の想い、家族や支援者との関係などをまとめ、それをもとに審査を行っていた。2021年に過去4年間の入選者80名による企画展を開催し、2022年以降はこれまでのレガシーを継承しつつ毎年ゲストキュレーターを迎える新たな試みを実施している。

2022年に「ザワメキアート展」の事務局機能を拡大し、ザワメキサポートセンターを設置しました。「ザワメキアート展」は「福祉×美術」と「丁寧な取材」を特徴としており、これまでの実績はセンターの財産となっています。今後は展示関連の事業だけでなく、作品の保管や貸し出しなどの新たな課題にも取り組んでいきたいと思っています。

Check

Column

障害者による表現をテーマに 3つの展覧会を合同開催



2023年11月29日から12月3日までの5日間、埼玉県立近代美術館の一般展示室では「南関東・甲信ブロック合同企画展 2023『カウンターポイント —それぞれの寄り添うかたち—』」のほか、2つの展覧会を合同開催しました。



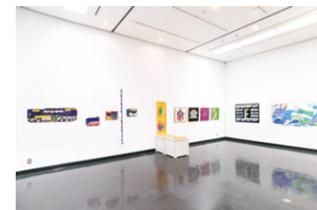
1 第14回埼玉県障害者アート企画展 「Coming Art 2023」

埼玉県が毎年実施する「障害のある方の表現活動状況調査」をもとに、30以上の福祉施設や行政の職員、美術の専門家などがネットワーク（埼玉県障害者アートネットワーク TAMAP±0）を結び、話し合いながら出展作品を選考。今年は103名の作家による約600点の作品を展示しました。アートセンター集（p.17）が事務局を担っています。



2 アートミーティング at さいたま国際芸術祭

「アートミーティング」とは新潟市が2020年より毎年開催している展覧会で、埼玉県の「障害のある方の表現活動状況調査」や「埼玉県障害者アート企画展」を参考にしています。今回は「さいたま国際芸術祭 2023」市民プロジェクトの一つである「創発 in さいたま」のキュレーター企画事業として開催しました。さいたま市から6名、新潟市から7名の計13名のアーティストによる作品を展示しました。



3 南関東・甲信ブロック合同企画展 2023 「カウンターポイント —それぞれの寄り添うかたち—」

本誌で紹介した作品展示（p.12～22）に加えて、各都県における支援のあり方をテキストで紹介しました。展覧会の概要は p.10 をご参照ください。

REVIEW

「カウンターポイント—それぞれの寄り添うかたち—」を振り返って

合同企画展について、アドバイザーや主催者、来場者のコメントで振り返ります。

中津川浩章

(本展アドバイザー/
美術家・アートディレクター)



3つの展覧会からなる合同展という今回の企画は、これまでも増して広がりや深さを持つ展覧会となりました。同じ場所で体験する複数の展覧会からは異なるものと共通するものが同時に浮かび上がってきます。障害がある人たちのアートが放つ熱量とそれを支え関わる人の多様な取り組み、現在進行形で生きている人間の感覚、わたしたちを取り巻く社会、そして未来の在りようまで。福祉の文脈のなかに埋もれてきたものやアートのコンテクストのなかで見えなかったものが、「アート×福祉」のアプローチによって見えるようになること。そこに見えてくる価値や意味を言語化し社会につなげていくこと。アートそして福祉が交わることで生まれる可能性の鼓動を感じました。

宮本恵美

(本展主催「南関東・甲信障害者
アートサポートセンター」)

コロナが5類になったことで多くの方にご来場いただき、さらに有観客でのトークイベントやパフォーマンス実演も行うことができました。展覧会は発表の機会だけでなく、人と人がつながる場。老若男女、障害のある人も学生さんも、小さなお子さんも、いろいろな人が展覧会を見学を訪れ、交流が生まれていました。

来場者アンケートより(一部抜粋)

- 「おばけのゴストント」の作家さんについてお話を聞かせて頂き、とても気持ちがこもっている作品であることが伝わりました。(40代、無職)
- 12/3のパフォーマンスを第一の目当てに近美に来ました。OUTBACKアクターズスクールの皆さんも、金澤さんも、クオリティが高く、とても楽しめました。(60代、教育関係者)
- 南関東・甲信の活動のそれぞれの特徴もあって、大変興味深く拝見しました。特に、アートと演劇や他の分野、領域とのコラボレーションの可能性など、現代アートの動向とあわせて考えてもとても意味があるのではと思います。(50代、自由業)
- 尾澤佑貴：段ボールアートが素晴らしいです！笠原愁平：絵本みたい。デジタル作品なんですね。とても温かみがあります。／小林健太郎：グッズがとても可愛い。買ったかった。／金澤一摩：人形劇を人形からストーリー・操作までするなんてすごすぎる！(50代、パート・アルバイト)
- 都築渉：心をひかれました。絵の前から動けなくなりました。／笠原愁平：細かいところまで再現されていて、今にも動き出しそうでかわかったです。(40代、公務員)
- いろいろな支援の仕方があって、作家さんたちの個性が生かされていくのだなと改めて感じました。(50代、公務員)
- よりアートらしい作品や、映像も含めて、非常に総合的な展示となっているように感じられました。各地の作家・作品に出会えてよかったです。特に佐谷香さんの抽象的風景の色彩やタッチが非常に良かったです。(無回答)
- 実際見られなかったのですが、人形劇の舞台は秀逸ですね。(70代以上、福祉関係者・医療関係者)
- 山本実さんの《富士山》は昨年に続き見ることができました。面白いです。まあい広場の作家さんは大好きです。(60代、経営者・役員)
- 《雨の日》(等々カモニカ) 欲しいと思いました。(40代、教育関係者)
- 南関東・甲信ブロックの活動が見れてうれしいです！ こういう紹介とか、北や南にアトリエマップがあるならいいのかなあと思っていました。等々カモニカさんの《雨の日》めっちゃイイです。(40代、福祉関係者)
- いろいろな素材が形になっていくのがすごい。(70代以上、無職)
- グッズなどの販売もあって楽しめた。(40代、無回答)
- 榎本吉隆さんの作品《うみ》、青がきれいだった。(40代、会社員)
- 県外からの施設の作家の作品がたくさん展示されていて、びっくりしました。(30代、絵画作家)
- 高橋朋之：すごい感動。ゆっくり見たいと思いました。(70代以上、無回答)

Part 2

TRAINING

研修

支援センターのより良い活動に向けて、アトリエの見学や専門講師によるレクチャーを開催しました。今年度は、これまでコロナ禍では難しかった対面での交流企画も実施しています。オンラインと対面を使いわけることで日々の業務に負担をかけずに交流の機会を設ける工夫をしました。



1. アートを仕事にする 福祉現場の アトリエ見学ツアー



広域センターの実施母体である、社会福祉法人みぬま福祉会の施設「川口太陽の家」と「工房集」を見学しました。みぬま福祉会では20年以上前から障害のある人の表現活動を「仕事」と位置付けてきました。そんななか「活動を始めたい」「どのように表現が生まれているのかを知りたい」といった見学依頼の相談が多く寄せられるため、作家の創作風景や支援員との関わり、福祉実践などを見ることが出来る「アトリエ見学ツアー」を定期的に開催しています。

ツアーではみぬま福祉会の施設「川口太陽の家」と「工房集」にある5つの活動班をまわりながら、支援員や作家本人から直接話を聞くことで、障害のある人たちの表現活動にとって大切なことを考える機会となりました。参加者からは「余暇ではなく仕事として日常的に制作をし、作品が発信され社会とつながっている。一朝一夕には真似できないが、福祉のアート現場の目指す理想の光景を見せていただいた」といった感想も。2023年度最初の研修でもあり、ツアー後には定例会議も兼ねて各支援センターと広域センターの事業計画を発表し合いました。

[2023年6月6日(火)、みぬま福祉会(埼玉)、19名参加]

Schedule

当日のスケジュール

- 13:30 「川口太陽の家」見学
- 14:30 「工房集」見学
- 15:15 支援センターによる事業計画の共有
- 16:45 広域センターの事業計画の共有



会場



かわぐちたいよう いえ こうぼうしゅう
川口太陽の家／工房集 (社会福祉法人みぬま福祉会)

「川口太陽の家」は1986年、埼玉県川口市に開所した障害福祉サービス事業所。1984年にスタートした無認可作業所を前身とする。重い障害があっても「働くことは権利」と位置付け一人ひとりに合った仕事を模索している。開所当初は缶プレスやウエスづくりが主流だったが、現在は絵画、織り、スタンドグラスなどの表現活動へと幅が広がっている。2002年には近隣に「工房集」を開所し、現在は合わせて60名ほどが通い、5つの班で活動する。

… Tour

「川口太陽の家」と「工房集」の5つのグループ

アトリエ見学ツアーでまわるグループを紹介。サンだいち班、じゅうに班、きらっと班、あおぞら班の仲間*は「川口太陽の家」、めーべ班は「工房集」でそれぞれ活動しています。

ウエスづくりのほか表現活動も

サンだいち班

強度行動障害のある仲間が多く活動している。ウエス(工場などで油拭きなどに利用する布)づくりの仕事などを中心に行う。作品は日常生活の延長から生み出されたものが多く、それぞれに合った方法で自分を表現している。



紙粘土の「ニギリ」など、一人ひとりに合った創作を

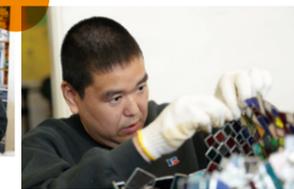
じゅうに班

知的障害だけでなく、身体障害があり車椅子で生活する仲間が多く活動している。絵画やガラス工芸などさまざまな創作に取り組む。なかでも特徴的な作品は、紙粘土を握った「ニギリ」。重症心身障害のある仲間が表現できることは何かと試行錯誤の末にたどりついた。

絵画や切り絵、立体など多様な表現に取り組むグループ

きらっと班

絵画や切り絵、立体作品などに取り組む。さまざまな障害のある仲間が活動するため一人ひとりに合わせた作品づくりを考え、可能性を探り、さらに作品の活かし方を考えている。相手を思いやり、互いに協力する関係があり、仕事には真剣でありながらどこか和やかな雰囲気がある。



ガラスを操り、スタンドグラスを制作

あおぞら班

スタンドグラスを専門に扱う班で、小さなアクセサリから巨大なランプやオブジェなど、創作の形はさまざま。色とりどりのガラスをつなぎ合わせ、「その瞬間」を表現している。ガラスを扱うときのまなざしは、まさに職人そのもの。作品は多くの人々を魅了している。

30年前、法人で最初に表現を仕事にした仲間たちとともに

めーべ班

さまざまな障害のある仲間が活動している。アトリエ「工房集」で活動をしているこの班は、法人内でも表現活動を仕事にした先駆者のグループ。30年前、どんな作業にも参加しようとする一人の女性がいた。しかし彼女は絵を描くことだけは興味を示していたので、これを仕事にするしかないという考えが職員のなかに生まれた。この発想は施設全体の取り組みに広がり、さらに施設見学会などを通じて多くの来訪者に表現活動の実践を紹介している。仲間へ寄り添うとはどういうことか、何のために行うのか。仲間それぞれが自分らしく活動を続け、豊かな暮らしができることを目指している。



*みぬま福祉会では施設利用者を「ともに働き・暮らし・地域をつくる仲間たち」という想いをこめて「仲間」と呼んでいる。

2. サポートブックを起点に 支援センターの 目的や運営を考える



2022年度に発行された『障害者芸術文化活動支援センター運営サポートブック』（以下、サポートブック）は全国の支援センターの運営の参考や指針となる本として各地で活用されています。本研修では編集を担当した3名の講師を迎え、本書の1～2章の内容に沿ったレクチャーとグループワークをオンラインで行いました。前半では「障害者芸術文化活動普及支援事業の概要と支援センターの運営」、後半は「行政との協働」をテーマに実施。研修を通じて支援センターを運営する「目的」「活動内容」「行政との協働」などを改めて考える機会になったとともに、それぞれの地域や立場の視点を共有しました。

[2023年7月5日（水）、オンラインにて実施、16名参加]

地域の特性に応じた支援センター運営のサポートとなる『障害者芸術文化活動支援センター運営サポートブック』。支援センターの職員のほか、自治体の担当者にも役立つ内容（NPO法人ドネルモ発行、A4、70頁）

Schedule

当日のスケジュール

- 14:00 前半:講師3名によるレクチャー
- 14:50 グループワーク
- 15:20 後半:講師1名によるレクチャー
- 15:30 グループワーク、オブザーバーからのコメント



講師



ながつ ゆういちろう
長津結一郎（九州大学大学院芸術工学研究院准教授）

1985年北海道生まれ。多様な関係性生まれる芸術の場に伴走/伴奏する研究者。専門はアーツ・マネジメント、文化政策。多様な背景を持つ人の表現活動に着目した研究を行うほか、音楽実技やワークショップに関する教育、演劇・ダンス分野のマネジメントやプロデュースにも関わる。近著に『アートマネジメントと社会包摂』（共編著、水曜社、2021年）、『舞台の上の障害者：境界から生まれる表現』（単著、九州大学出版会、2018年）ほか。



みやた さとし
宮田智史（NPO法人ドネルモ事務局長）

1984年福岡県生まれ。2012年にNPO法人ドネルモを設立。超高齢社会を見据え、一人ひとりの可能性が誰かと関わることでかたちになってゆく社会をつくることを目的に活動。さまざまな属性や境遇にある人同士がともに学び合う教育プログラム、ワークショップの設計・運営・評価を中心に、デザインやアートからまちづくり、社会教育、生涯学習まで幅広い分野の事業に取り組む。一般社団法人ぶらっとどっと理事、大野城市共働アドバイザーなど。



さくらい かな
櫻井香那（NPO法人ドネルモ職員）

1987年生まれ。大学卒業後、メディアコンテンツデザインや、障害福祉施設職員としてアート活動のサポートに携わる。2014年、NPO法人ドネルモに入職。文化庁と九州大学による共同研究「文化芸術による社会包摂の在り方」に関する事業や、厚生労働省の令和3・4年度障害者総合福祉推進事業で、調査、冊子編集、執筆業務などを担当。

… Lecture & Work

支援センターの運営や行政との協働を考えよう

長津結一郎+宮田智史+櫻井香那

サポートブックを活用したレクチャーの内容を紹介。各レクチャー後のグループワークでは本書のワークシートを活用。前半は今年度の目標や「力を入れていること」「見直したほうが良いこと」などを書き出し、4グループにわかれて話しました。後半では「より良い行政との協働に必要なことは何か」などについて各グループで意見を交わしました。

支援センターの役割とは？

障害のある人の芸術文化活動では、作品制作だけではなく、芸術文化に触れるプロセスを大切に活動が行われています。本事業で、地域ごとに「中間支援」に取り組んでいるのが「障害者芸術文化活動支援センター」。では中間支援とは何か。これはNPOの活動支援を目的に人材や資金、情報などの資源提供者とNPOの間をつなぐ仲介機能を指す「intermediary（インターメディアリー）」の訳語として、1990年代頃から使われるようになった言葉です。支援センターの中間支援は、障害のある人と社会の変化やニーズを把握し、人材や情報、芸術文化活動に関わる機会を提供したり、多様な領域の関係者をつなげたりしながら、障害のある人がより活動しやすい環境をつくる役割を担っています。

支援センターと行政の協働

支援センターの運営にあたって、都道府県は実施主体でもあり、両者の連携は必要不可欠です。福祉と文化にまたがる分野であることから両方の関連部署と連携することが事業促進の鍵となります。支援センターへの聞き取り調査では、都道府県が、県内の市町村、障害福祉施設、文化施設、特別支援学校などへの周知やつなぎを行っている例や、事業の企画立案から評価まで、常に都道府県の担当部署と相談しながら進めている例がありました。

目的を達成するための 運営サイクルと年間計画

こうした支援センターの役割や目的を達成するには、単年と複数年、両方の視点で運営サイクルを意識しましょう。「見直しを立てる」「実行・行動する」「振り返る」というサイクル（下図）を年間ごと、事業ごとに回していくことも重要です。支援センターの業務は幅広く、どこまでやったらよいか迷ったり、都道府県の担当部署とのすり合わせが必要だったりする場合があります。それぞれの目標や年間計画を考えるためのヒントと、実際の支援センターの実践例をもとにした事例をサポートブックで紹介しているので参考にしてください。例えば「事業終了後の振り返り」は、次にに向けた改善点だけではなく、想定していなかった成果や新たな価値の発見にもつながる、とても重要な機会です。支援センターの職員だけでなく、事業の協力者や参加者も一緒に気軽に話せる場をつくってみたいはいかがでしょうか。



運営サイクルの例。『障害者芸術文化活動支援センター運営サポートブック』より

Lecturers
Comment



長津結一郎さん

グループワークでは各自治体の担当者も活発に意見交換ができました。行政の動きは経験者でないといわれない面もあり、スケジュールなどについて行政側から先導してもらえる関係が構築できると理想的だと思います。



宮田智史さん

福祉や文化の部署と一緒に会議を行ったり計画を立てたりしていくために、自治体との連携のスキームづくりが大切だと感じました。合意形成や財務、議会の流れを理解しておく自治体とコミュニケーションをとりやすくなります。そうしたことを知る機会の必要性も感じました。



藤原顕太さん 広域センター事業アドバイザー

本ブックは各支援センターの個性ある取り組みが特徴ですが、それぞれが別のものを目指しているわけではなく背景にある考え方や目指すべきものは共通点があります。その基盤を共有するうえでも、この本は貴重だと思います。今後も本書をもとに対話の機会をつくっていききたいですね。

3. 教育機関との連携と 多様なアートの 学びについて考える

支援センターの事業を推進するためには多分野との連携が不可欠。本ブロックの二つの支援センターから2名の講師を迎え、教育機関との連携の意義や支援センターとして必要な視点を学び合いました。千葉県の支援センター、千葉アール・ブリュットセンターうみのもりのこまちだたまお氏と、神奈川県支援センター、神奈川県障がい者芸術文化活動支援センターの田中真実氏によるレクチャーのあと、後半のグループワークでは、レクチャーの感想や質問点などを話し合いながら、各地の状況などを共有しました。

[2023年8月9日(水)、オンラインにて実施、19名参加]

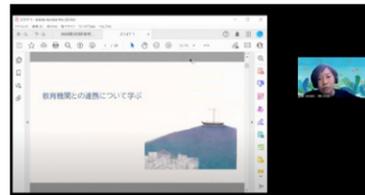


たまあーと創作工房でのワークショップ

Schedule

当日のスケジュール

- 14:00 こまちだたまお氏レクチャー
- 14:30 田中真実氏レクチャー
- 15:00 グループワーク
- 15:30 グループワークの発表、オブザーバーからのコメント



講師



こまちだたまお (株式会社いろだま代表取締役)

1971年千葉県生まれ。1994年東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻卒業、1996年東京藝術大学美術学部修士課程油画専攻修了。1998年より、たまあーと創作工房こども教室美術教室を開設し、1歳から200歳までのボーダーレスなアートの共育活動に取り組む。2019年には株式会社いろだまを設立し、代表取締役就任。同年に開設された千葉アール・ブリュットセンターうみのもりに携わり、2020年よりセンター長を務める。2022年4月から千葉県文化芸術推進懇談会委員。



田中真実 (認定NPO法人STスポット横浜事務局長、副理事長)

大学では地理学、大学院では都市計画を学び、地域と芸術文化の関わりについて関心を持つ。2008年よりSTスポット横浜に入職。文化施設や芸術団体と学校現場をつなぐ横浜市芸術文化教育プラットフォーム事務局、地域文化をサポートするヨコハマアートサイト事務局の運営を横浜市と協働で行う。2020年より神奈川県と協働し、福祉現場と芸術文化をつなぐ神奈川県障がい者芸術文化活動支援センターを運営。芸術文化分野での中間支援のあり方について模索を続けている。

撮影：金子愛帆

… Lecture 1

現場での実践を通じて考えた、 「教育」と「福祉」の共通点

こまちだたまお

千葉県いちのみやま一宮町の造形教室「たまあーと創作工房」を運営しながら、アートの出張授業や大学などと協働して行う地域創生事業などに携わる、こまちだたまお氏。レクチャーでは、教室やワークショップの現場で大切にしていることを中心に話されました。

あるがままの表現を引き出す、 アートの教室

普段は造形教室を運営しているほか、月に25カ所ほどの頻度でアートの出張授業を行っています。保育園や小学校、特別支援学校などの教育分野の施設のほか、福祉分野では、放課後デイサービスや就労継続支援、高齢者や難病の方のための施設などを訪問しています。日々の活動のなかで、かけ離れているようにもとらえられがちな「教育」と「福祉」には重なり合う部分があると感じています。アートはさまざまな答えが生まれるツールであるからこそ、多様な人がアートを通じて時間をともにすることができるからです。

教室に山本実さん (p.21) が生徒として通うようになったのは23年前。彼にとっていい環境をつくるための方法を、奈良にあるたんぼぼの家が主催する研修会に参加して学びました。その後、また別の障害のある生徒に出会ったり、出張授業を行うなど活動の幅が広がったりするなかで、自身も学びを続けています。

教室の方針は、人が「アートで得ること」を常に考え、上手い下手ではなくその人にとってベストな表現を導き出すことです。美術を学んだ学生時代に「もの派」の教授たちに学んだことも大きな影響を受けています。もの派の「すべてのものや行動が表現につながる」という考え方が、障害のある方のあるがままの表現を引き出すことにもつながっているのかもしれない。



たまあーと創作工房 (青のアトリエ) 制作する山本実さん

大学との連携

教育機関との連携の一つに、千葉市にある植草学園大学とのつながりがあります。千葉アール・ブリュットセンターうみのもり (以下、うみのもり) の特別顧問でもあり同大学の発達教育学部で教える野澤和弘先生のご縁で、うみのもりの人材育成講座や展示会の運営には学生ボランティアの協力を得ています。特別支援教育を学んでいる学生でもあり、実習とは違う現場のあり方を体感してもらおうことができていると思います。また、障害者の芸術文化活動を卒業論文のテーマにしたいという学生に協力したことがきっかけで担当の先生とつながり、その後ワークショップを行ったこともありました。

ともに生むクリエイティブな時間

私の役割は、障害のある人の表現の場をつくることと、表現の場をつくる人を育てることの二つがあると思っています。教室の教え子が福祉や医療、教育関係に進学するケースもありますが、アートのおもしろさを知り、アートが人の支えになることを実感した経験は少なからず影響しているかもしれません。

ケアの現場で働いている人には、例えば「この人には絵なんて描けない」というような固定観念をそっと脇に置いてもらいたいと思っています。美術教育者の資質は必要ではなく、むしろ「敵」と考えても良いかもしれません。必要なのは、その人自身が発しているもの、欲しているものを感知してトライ&エラーを繰り返しながら、ともにクリエイティブな時間を生み出していくこと。相手の表現したいものを受け止め、それをより良くするにはどうすればいいかを考えていくことが大切です。それは、粘土を付け足したり削ったりしながら形をつくっていくような作業にも似ていると思います。

… Lecture 2

行政と民間が協働する、中間支援の仕組み

田中真実

認定 NPO 法人 ST スポット横浜のスタッフとして中間支援に関わる、田中真実氏。レクチャーでは現在の仕事に出会うまでの経緯と、神奈川県や横浜市での取り組みについて話されました。

学生の頃の興味が 中間支援の仕事に

大学生の頃、芸術や文化が専門だったわけではなく、地理学とまちづくりを学ぶなかで地域に向けた視点に興味を持っていました。まちなかで展開する大道芸イベントや中高生向けの演劇ワークショップに学生ボランティアとして参加したことがきっかけで、子ども向けの活動や演劇に携わるようになりました。その後、障害のある人とない人が同じ立場で制作する演劇作品に参加して、舞台手話通訳の可能性を知ったり、水俣病を題材にした演劇で差別や偏見などの向き合い方を考えたりして、福祉への関心を持ちました。NPO 法人 ST スポット横浜には 2008 年から勤務しており、当初から文化施設・芸術団体と学校の連携による教育普及事業を担当しています。ここでは二つの事例を紹介いたします。



横浜市芸術文化教育プラットフォーム「アーティストが学校へ」

「アーティストが学校へ」 出張する教育普及授業

2004年にスタートした「横浜市芸術文化教育プラットフォーム『アーティストが学校へ』」は、芸術家が直接、学校へ出かける仕組みです。横浜市の事業として当法人が事務局を担い、年間およそ 140 を超える学校で実施しています。音楽や美術、演劇、ダンス、伝統芸能など、幅広い分野を体験型または鑑賞型のプログラムで提供しています。横浜市では大きな文化施設が中心部に集中しており、市域も広いので、子どもが自分たちだけで文化施設に出かけるのは難しい状況です。学校の授業に組み込むことで、子どもたちへの芸術文化体験の最低保障を行いながら、アートを身近に感じてもらうことを目指しています。またそれを支える大人たちとどう連携していくかにも重きをおいています。

地域の文化施設や芸術団体が、学校での実施内容を調整するコーディネーターを担っていることも特徴です。大きな目的はそれぞれの学校の実情に応じ、コーディネーターの専門性を生かしながら子どもたちにとって効果的なプログラムを検討してもらうこと。さまざまな施設や団体と協働することでプログラムの種類に広がりや生まれています。

県内の福祉施設へのアンケートをもとにつくった本

次に 2023 年に神奈川県障がい者芸術文化活動支援センターから発行した『いっしょにたのしむおさんぼマップ 障がい福祉とアートが会おうところ』を紹介します。これは福祉施設に対して行った「神奈川県内福祉施設への芸術文化活動に関する調査」をもとに、神奈川県内の芸術文化活動に取り組む福祉施設をマップと一緒に掲載した冊子です。多様な人が訪れやすい文化施設の情報もあわせて載せています。学校卒業後の進路を検討する際、食事や交通などの条件で決められがちな福祉施設を「アートの活動ができる施設に通いたい」といった要望にも応えられたらと考えました。



『いっしょにたのしむおさんぼマップ 障がい福祉とアートが会おうところ』

… Groupwork

新しいアートの学びを広げるために

後半は3つのグループに分かれ、レクチャーの感想や各地の取り組みの状況などが共有されました。こまちだまお氏と田中真実氏もディスカッションに加わりました。



参加者の声

“ トライ&エラーを繰り返しながら、作者と支援者がクリエイティブな時間をもたして作品をつくっていくことが大切であると感じました。 ”
(神奈川県福祉子どもみらい局福祉部障害福祉課)

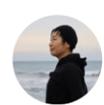
“ どういう枠組みをつくり、支援しているか、来年に向けての課題が見えてきました。 ”
(長野県支援センター)

“ こまちださんのレクチャーのなかで美術教育者の資質は時に「敵」にもなりうるというお話が印象に残りました。 ”
(埼玉県支援センター〈特色型〉)

“ 田中さんのお話では、もともと地理学を勉強されていたことが「おさんぼマップ」につながっていると感じました。現場の声を大切にしているところが重要だと思います。 ”
(山梨県支援センター)

“ 実際にこまちださんのワークショップに参加したことがありますが自分を表現できる時間でした。 ”
(千葉県環境生活部スポーツ・文化局文化振興課)

Lecturers Comment



こまちだまおさん

体育や音楽、美術の教育については、本当に評価する必要があるのだろうか？と常々思っています。中高生は普段からさまざまな評価のなかで生きていて、がんじがらめになっています。評価しないことも大事で、自分なりの考えを持つことの大切さを知るような機会をつくらたいと思っています。



田中真実さん

教育や文化、福祉の現場では、それぞれ先生や職員さんたちが多くのことを担わなければならないと思うので、子どもたちのことをその分野の専門職だけに押し付けないことが大事だと思います。どうやって外部から手助けしているのか、同じ社会のなかにいる人間として関わり方を考えていかなければならないとあらためて感じました。



藤原顕太さん 広域センター事業アドバイザー

お二人が現場と中間支援それぞれの立ち位置で話していただけたことで、視野の広がりや生まれ、その後のディスカッションの盛り上がりにつながりました。表現の楽しさを学校教育の現場に持っていくのは重要だと感じます。普段と少し違う価値観を教育現場に持っていくときに、どうすれば学校側とうまくコミュニケーションをとることができるのか、横浜市のようなプラットフォームをほかの地域でもつくるためにはどうしたら良いかなど、課題がいろいろと出てきましたが、引き続きみなさんと一緒に考えていきたいです。

連携事務局 (NPO 法人アート NPO リンク、株式会社 precog)
神奈川県内の活動や仕組みについて、これだけ長い年月をかけて体制をつくっていることを今回あらためて知ることができました。またこまちださんは制作を通じて現場で何をすべきか真剣に考えていらっしゃるのを感じました。美術教育と福祉の課題は根底ではつながっているという指摘もあり、グループワークでの議論も共感する部分が多かったです。

Column

支援センターを訪れる 交流企画

南関東・甲信ブロックでは今年度より新たに希望者を対象に「交流企画」を実施。各支援センターの主催するイベントに参加することで、担当者の交流を促進し連携を深め、事業の手法について学びの場となることを目指しました。



第1回 2023年7月17日(月・祝)

シンポジウム/ワークショップ 「こども・アート・障害を考える」

午前には花澤洋太氏によるスライド使用の講義「東京学芸大学と特別支援学校の生徒たちとの関わりのお話」、野澤和弘氏と花澤洋太氏によるシンポジウム「障害のあるお子さんたちとのアートの関わりの可能性、特別支援学校での関わりについて」、午後は花澤洋太氏とクリスティーヌ・ブレ氏によるワークショップ「障害のあるかた、園児～小中高生対象の『えのぐと布を使ったドロ잉』ワークショップ」を行いました。

会場：植草学園大学・短期大学 M棟1階21-22教室（千葉県千葉市）
主催：千葉アール・ブリュットセンターうみのもり/共催：千葉県

第2回 2023年10月18日(水)

舞台表現分野 うごいてはっけん、みんなのおもしろ

会場：千葉県東総文化会館 大ホール（千葉県旭市）
主催：千葉アール・ブリュットセンターうみのもり



第3回 2023年11月3日(金・祝)

ティアラ表現ワークショップ「のはらフル」 発表とオープンワークショップ DAY!

会場：ティアラこうとう 大会議室（東京都江東区）
主催：東京アートサポートセンター Rights（ライツ）



第4回 2023年12月3日(日)

埼玉県障害者アート企画展・ アートミーティングatさいたま国際芸術祭 ギャラリートーク「表現の種をまく さいたまから新潟へ」

会場：埼玉県立近代美術館 一般展示室2（埼玉県さいたま市）
主催：埼玉県障害者アートネットワークTAMAP±O、社会福祉法人みぬま福祉会



第5回 2023年12月9日(土)

ザワメキアート展 2023 Roots of Arts 対談「ヒトはなぜアートを手にしたのか？」

会場：長野県立美術館 しなのギャラリーB/ホール（長野県長野市）
主催：長野県、ザワメキサポートセンター（長野県障がい者芸術文化活動支援センター）



Part 3

MEETING

意見交換会

意見交換会は、広域センターや支援センター、自治体の担当者との交流や対話の場です。支援センターと自治体の連携、企業との関わり、活動の認知度向上など、各都県が課題とするトピックを取り上げ、意見交換を進めました。



1. 福祉と芸術に関わる事業で各都県と支援センターはどのように連携しているか？



本事業を進めるうえで欠かせないのが、各都県の支援センターと自治体の連携です。各自治体職員より、支援センターとの連携状況を報告し、最後に3つのグループにわかれてディスカッションを行い、参考にしたい点や感想などを伝えました。

(2023年9月8日(金)、オンラインにて実施、26名参加)

長野県 開設から2年目。県庁内の他部署とも積極的に連携

長野県支援センターは開設して2年目になりますが、毎月末、県との定例会議で情報を共有しています。県としても支援センターの業務や課題の把握などに努め、相談事などを共有する場にもなっています。長野県では特別支援教育、文化芸術、障害者芸術の担当課が異なるため、支援センターからのコンタクトは当課を通じて打ち合わせの機会を設けるなど、県庁内の関係課や関係団体との協力体制を構築しています。また、広報面では、支援センターからの関係機関などへの周知に加え、県からも市町村教育委員会などの関係機関へのチラシやプレスリリースの

配布などの発信に取り組んでいます。さらに必要に応じて支援センターが実施する事業へのスタッフの派遣などの協力も行っています。

(北原陽平、長野県健康福祉部障がい者支援課)

どの県でも作品のレンタルなどについて相談があると思いますが、長野県からもそのような相談を受けています。他県の事業を参考にしながら進めていきたいと思っています。

(中村勲二、長野県支援センター)

千葉県 展覧会「うみのもりの玉手箱3」の広報支援を実施

2024年1月に千葉県立美術館で実施する作品展「うみのもりの玉手箱3」の広報支援について紹介します。2022年度まで千葉県身体障害者福祉協会が主催となって毎年開催されていた「千葉県身体障害者作品展」を、支援センター事業に組み込む形で規模を拡大して実施します。「千葉県身体障害者作品展」で、優秀作品に県知事賞などが贈られており、その点もモチベーションの一つとなっています。県としては作品応募のエントリーについて、記者クラブへの資料の投げ込みや報道発表を実施しました。また新聞折り込み、県内の各市役所、町村役場などの公共施設、

コンビニエンスストア、金融機関などに配布している県の広報誌『ちば県民だより』にも募集情報を掲載したほか、県のホームページへの情報も掲載しました。

(大塚直人、千葉県環境生活部スポーツ・文化局文化振興課)

本年度はコロナ禍も明けて、大塚直人さんにも人材育成講座に参加いただきありがたいです。活動への理解につながっていると思います。

(こまちだたまお、千葉県支援センター)

神奈川県 県と支援センターの強みを活かし、より密な連携体制に

神奈川県支援センターでは、ワークショップや勉強会などを実施しており、その募集に当たっては、県が持つネットワークを活用し、「障害福祉情報サービスかながわ」というサイトへの掲載や対象事業所に一斉メールで配信しています。また、福祉事業所における芸術文化活動の現状把握が課題だったことから、2022年度に県と支援センターが協力して県内の芸術文化活動の実態・意識調査を行いました。調査の結果、福祉施設での芸術文化活動を行う際に地域や他団体との連携を望んでいることがわかりました。支援センターで多角的な面から支援の在り方を考えられるよう、県が支援センターと各市町村担当課との「顔つなぎ」を行

いました。引き続き障害者の芸術文化活動に関する情報の収集・発信を行い、支援センターと県が持つそれぞれの強みを活かし、連携して事業を展開していきたいと思っています。

(志村稔、神奈川県福祉子どもみらい局福祉部障害福祉課)

県による障害福祉サービス事業所への一斉メールの配信はとても助かっており、イベントの参加者が集まっています。また各自治体の担当課につないでいただきありがたいと感じます。

(川村美紗、神奈川県支援センター)

東京都 コロナ禍ではかなわなかった連携を、今後さらに推し進める

連携事例の1点目は、東京都支援センターの広報活動の支援です。都のウェブサイトにはワークショップの開催や募集記事、相談支援に関する無料法律相談の情報も掲載しています。2点目は、都の芸術文化施策の所管部署が新たに立ち上げる予定の東京芸術文化相談サポートセンターに、障害者の芸術文化活動に関する相談やお問い合わせ先として、支援センターを紹介したことです。今後も都や区市町村など、さまざまな機関と支援センターをおつなぎしたいと思います。また今後、コロナ禍ではかなわなかったワークショップの見学を予定しており、見学後には

支援センターの方と体験を共有したいと思います。新型コロナ5類移行に伴い活動の幅が広がるなかで、都としてさらに支援センターとの連携を深めていきたいと考えています。

(秋山麗奈、東京都福祉局障害者施策推進部企画課)

ウェブサイトの掲載や各自治体へのメール配信に加え、事業を実施する際に自治体の担当者を紹介してもらうなど連携して取り組んでいます。

(村上あすか、東京都支援センター)

山梨県 「楽しむ・支える・深める」の三つを軸に、つながりを構築

山梨県障害者文化芸術活動推進計画に基づき「楽しむ」「支える」「深める」の3つの観点で事業を推進。相談支援、研修会の開催、ネットワーク体制の構築に向けて取り組んでいます。相談支援は支援コーディネーターを設置。作品の創作や二次利用商品の開発や販売などに関する相談を受け付けています。研修会は障害のある人となない人を対象に実施。2023年度は情報保障の観点から日本語字幕と音声ガイドのついた映画の鑑賞会を行い、感想を伝え合うワークショップをしました。また物品販売や舞台発表を行う芸術文化祭を年1回開催していますが、2023年度は参加型のイベントを目指し山梨県支援センターのスタッフとともに県

内の事業所を訪問。開催にあたってアドバイスをもらっています。

(横森穂菜美、山梨県福祉保健部障害福祉課)

「楽しむ」では文化展を担当している障害者福祉協会「深める」では「いえなか美術館」というイベントを開催している anlib (アンリヴ) 株式会社なども意見交換を行い、それぞれが県の事業に向かって多様な意見を出し合いながらつづけています。

(瀧澤聡、山梨県支援センター)

埼玉県 広く深くつながり合いながら、多くの事業をともに進める

埼玉県支援センターとは、月1回の定例会にて情報共有や事業の相談などを行っています。この会議にはアートに取り組む30以上の福祉施設が参加しており、県にとって重要なコミュニケーションの場となっています。また、2021年度に開設した「埼玉県障害者アートオンライン美術館」は支援センターの協力も得て運営しており、コンテンツの一つである作家さんの創作風景動画は、両支援センターに制作を依頼しています。加えて、音楽フェス「VIVA LA ROCK」における作品展示で助言を得たり、浦和レッズからの作品利活用の依頼に対応していただいたりなど、広く深く力をお貸しいただいています。

(小澤圭佑、埼玉県福祉部障害者福祉推進課)

市町村の情報を、県の方、タマップのみなさん、基幹型センターとも連携して全体的な取り組みにできたらと思います。

(石平裕一、埼玉県支援センター〈特色型〉)

表現活動状況調査も14年前から実施しており常に県と情報を共有して取り組んでいます。展示の機会、企業への利活用やオンライン美術館も含め県の力は大きいです。また定例会に毎回参加してもらい、県内の事業所と常に情報共有しています。

(城田希希、埼玉県支援センター〈基幹型〉)



北原(長野県):他都県の取り組みを参考にしながら、長野の特色も出していきたい。今年は毎月の定例会で支援センターの活動の進捗状況を共有して取り組みを進めることができた。

横森(山梨県):山梨で取り組みたいことがすでに他県で進められており参考になった。横の連携をこれからも続けられたら。



秋山(東京都):定例会の事例や報告書類などが参考になった。



大塚(千葉県):さらに取り組みたい点としては、県の福祉部署との話し合いや定期的な打ち合わせだと考えている。

Discussion

グループディスカッション

小澤(埼玉県):予算に限りがあるなかで可能な限り事業効果が高められるよう心がけている。今後クラウドファンディングなど新たな財源も模索していく必要がある。

川村/田中(神奈川県・センター):山梨県の事例では、県独自の事業の一つが支援センターという印象を受けた。県としての事業を複数の団体で担う仕組みが整理されている。



森(厚生労働省):自治体と支援センターによる定例会の事例は、大変な面もあると思うが重要な取り組み。本ブログは自治体の担当者やセンターの対話の場が設けられ、全国的にも参考になるだろう。



2. 作品の二次利用などに関して 支援センターは 企業とどのように関わっていくべきか？

多くの企業でSDGsの取り組みが進み、その一環として障害者による芸術文化活動にも注目が集まっていますが、各都県の支援センターではどのように企業との連携を進めているのでしょうか。山梨県支援センターの問題提起を起点に意見を交わしました。

(2023年10月4日(水)、オンラインにて実施、19名参加)



問題提起

SDGsやオリパラの機運もあり、障害者の芸術文化活動を求めている企業が増えていますが、今日はみなさんにどのように関わってほしいか、いろいろなお意見や事例などをぜひうかがいたと思っています。企業のプロジェクトや依頼に応えることは、アーティストの活動を知ってもらう機会になる一方で、企業の利益に偏ってしまう懸念もあります。また企業の利益のために無償で対応することへの疑問もあります。(瀧澤聡、山梨県支援センター)

「講師を紹介してほしい」「事業に関する助成金について知りたい」といった情報提供であればもちろん行っていますが、一緒に企画を進める場合は支援センターの負担もあります。当支援センターで企業のプロジェクトに関わる相談はあるものの現状は企画への助言程度にとどまっています。また商品PRが中心で作家への還元が不明瞭な場合は、案件を受けるべきかをチームで慎重に検討しています。

(村上あすか、東京都支援センター)



discussion

支援センターとして、 企業との連携は どのように進めているか

埼玉県とも連携し作品の利活用を推進していますが、希望された作品が当法人の作家なら法人内で、ネットワーク内の作家であれば当該施設職員に入ってもらっています。施設に所属していない個人作家の場合は、支援センターが間に入ることにしています。ご依頼の内容によっては相談事業の一環と考え無償でお引き受けすることもあります。毎年開催している障害者アート企画展では図録を制作し、作品カタログの代わりになっています。企業の利益だけにならないよう、協働する際は企業の考えや企画の中身をヒアリングし、さらに実際に創作の現場を見て理解してもらったうえで進めています。

(宮本恵美、埼玉県支援センター〈基幹型〉)



コロナが5類に移行した後にいくつか相談がありました。千葉県支援センターの事業(5つのミッション)のなかでできることはやって、それ以外は線引きをしておくにしています。SDGsの波で話が増えている印象ですが、福祉だから安く思われていたり、芸術関係はやりがい搾取になったりしやすいので、きちんと費用がかかると伝えています。以前、主催が自治体で運営は企業という体制で展覧会を開きたいという相談があったとき、つながりのある作家を紹介し出展料も確保しました。障害がある方の展覧会や対話型鑑賞会などの相談については無償で支援しています。無償の相談のなかでも講師料が必要になりそうときは、事前に伝えるようにしています。

(こまちだたまお、千葉県支援センター)

以前、企業内に障害のある人による作品を飾りたいという相談がありました。権利の問題もあるので、アトリースの実績がある福祉施設を紹介しました。また別の団体から障害のある人のパフォーマンス発表の場を無償でつくりたいという話があったときは、クオリティを求める場合は出演料もかかるだろうと伝えました。対価については認識の差がないようにきちんと伝えるべきだと感じました。

(川村美紗、神奈川県支援センター)



このような課題は障害者アートだけではないのかもしれない。ほかの美術界隈、例えば漫画家や作家による作品のキャラクターなどは、企業とのやりとりのなかでどのように扱われているのか、研修などで知ることができたら良いと思います。

(石平裕一、埼玉県支援センター〈特色型〉)



企業との認識の差を どのように埋めていくか

2018年から作家や公共施設などの協力をいただきながら、県内のホテルやスポーツ施設などに無償で作品を常設展示し、魅力発信を行ってきました。今後はアートを通じて障害のある方への理解も深めつつ、有償の利活用にも取り組んでいただけるよう県のウェブサイトを通じて関心のある企業に案内していきたいと思っています。

(小澤圭佑、埼玉県福祉部障害者福祉推進課)



企業と作家の間に立って、支援センターがフィルターにならなければならないと思っています。創作の場を見てもうって理解を深めてもらうなど作家本人や支援者と関わってもらうことを大切にしています。

(小嶋芳維、埼玉県支援センター〈基幹型〉)



一番もやもやす部分はどこまで無償で携われば良いのかという部分です。「これから先はこのぐらいの金額であれば協力できる」と言えるような後ろ盾として、国の規程などあればいいと思います。

(新田千枝、山梨県支援センター)



障害者だから無償で提供してもらえというような認識ではなく、障害のある方もそうでない方も同等に扱われるべきだと思います。

(志村稔、神奈川県福祉子どもみらい局福祉部障害福祉課)



搾取構造をつくらないことが大事です。企業から依頼されて支援センターが作家とのマッチングをするのならば、相談支援としての情報提供とは切り分け、人件費分を企業に負担してもらっても良いかもしれません。

(藤原顕太、広域センター事業アドバイザー)



搾取されない構造を つくるには？

企業からの二次利用の話はありませんが、中間支援をどこまで行うか難しいところです。搾取にならない仕組みをつくっていくことは重要だと思います。

(大塚直人、千葉県環境生活部スポーツ・文化局文化振興課)



普及支援事業の中で、費用を一律に定めるのは規模の大小もあり難しいと思います。それぞれの業務を超える分については対価を受け取ったほうが良いでしょう。企業だけでなく、行政、教育関係についても無償でといわれることがあります。アーティストにおいても同じ。芸術文化全般のこととして考えていく必要があるかもしれません。

(田中真実、連携事務局／神奈川県支援センター)



支援センターの業務との線引きは気を付けています。障害者アートということで軽く見られることもあるので、伝えていきたいです。

(江崎亮、千葉県支援センター)



連携事務局が行う情報交換ミーティングで「相談してきた人に対してあなたも努力しましょう」と伝えていた方がお話があり印象的でした。相談する/される関係だけではなくパートナーとしての関係づくりも必要だと思います。相談してくれた相手の強みを活かして、良いパートナーシップを構築できると良いですね。

(兵藤菜衣、連携事務局)



Comment

今年度は各支援センターにヒアリングを行い、情報交換の議題を検討しました。支援センターへの相談は年々多様化しており、情報提供や関連機関の紹介、プロジェクトの伴走など対応はそれぞれの判断に委ねられています。支援センターは相談の窓口として、その後は関連機関に取り次ぐ、運営母体の法人の事業に移行するなど案件に応じて相談フローを整えることも大切です。また、場合によってはネットワークを活用することも重要です。並行してその地域の人材の育成も促進することで、地域全体の支援力の向上も期待できます。企業と連携する際には事業の目的を共有しながら良好な関係を築き、案件に応じた柔軟な対応を心掛けたいと思います。

中村亮子 広域センター担当者



3. 南関東・甲信ブロックの活動がより良くなるためには？

2023年度最後のブロック会議、前半は今年度の事業を振り返りながら評価チームの長津結一郎氏よりアンケートの結果を報告。後半は支援センターと自治体のグループにわかれ、それぞれのテーマで意見を交わしました。
(2024年2月9日(金)、オンラインにて実施)



他の支援センターの活動を知ることは身になる。合同企画展ではトークイベントのリベンジをしたかった。
(川村美紗、神奈川県支援センター)

活動自体を紹介するのであれば、シンポジウムなどの場を開く方法もある。大切なのはテーマの内容ではなく、みんなで一つの素材について話し合うことと戸口が開くこと。
(田中真実、神奈川県支援センター)

各県の展示会で、他県の作家さんの作品もコラボ出展ができるといいと思った。また合同企画展では、作家の背景も紹介できるとよい。
(吉澤千恵子、長野県支援センター)

discussion

Group 支援センター

会議や展覧会などの学び合う場がより良くなるには？

展覧会では障害のある人の表現にこれまで出会う機会がなかった人にも見てもらうことができた。多様な表現が発表できる場であってほしい。「展覧会」という位置づけも検討の余地があると思う。
(村上あすか、東京都支援センター)



作品展などのアウトプットの仕方はコツをつかんできた。一方で作品制作の現場など普段見えないところを学び合うことが大事なのではないかと思う。
(中村勤二、長野県支援センター)

全国的に展覧会は増えているのでどういった学びが必要か広域センターとして何をすべきか深めていきたい。
(宮本恵美、広域センター)



例えば埼玉県だと支援センターよりも運営母体の方が知名度は高く「障害者アートに力を入れている法人」という認識が強いように感じる。それが悪いわけではなく、そのような認知度向上もありだと思ふ。認知度が向上し企業の利活用が進むと、障害のある作家さんのやりがいや生きる喜びにつながる。
(宮山大輔、埼玉県福祉部障害福祉推進課)

相談件数は増えているが、内訳を見ると当事者やその家族、支援者からの相談が多く企業からの相談はあまり多くない。障害のある方にとって「悩みが解決する」と自体が一つの自己実現であり、その後のやりがいにもつながる。
(横森穂菜美、山梨県福祉保健部障害福祉課)

discussion

Group 自治体

本事業の認知度向上に必要なことやメリットは？

「県のたより」に支援センターのコラムを掲載したことで相談件数も少しずつ増え、認知度は向上していると感じる。認知度が上がることでつながりが増え、「発表の場がほしい」など相談者のニーズにより応えられるようになる。
(志村穂、神奈川県福祉子どもみらい局福祉部障害福祉課)

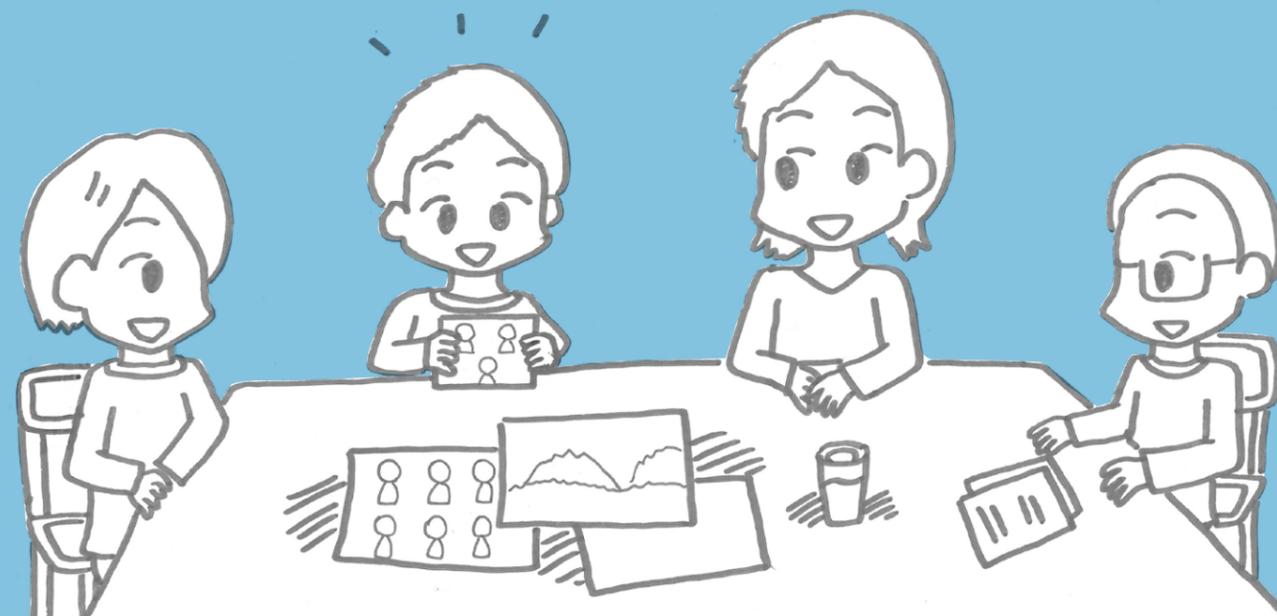


支援センターの認知度が高まり相談が増えると、解決が難しい案件も出てくる。自治体と連携することで、解決の糸口が見つかることも。福祉以外の情報をもつ行政と一緒に解決する方法もあると思う。
(小嶋芳維、広域センター)



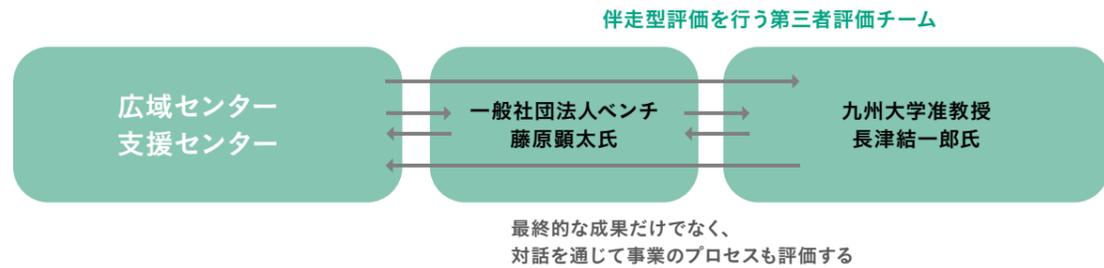
Part 4 EVALUATION 事業評価

ロジックモデルを活用した事業評価も3年目。引き続き長津結一郎氏と藤原顕太氏の伴走のもと、アンケートの集計から目指す成果がどのくらい実現できているかをはかりました。アウトカムの項目も増やすことでより良い事業を目指していきます。



評価体制

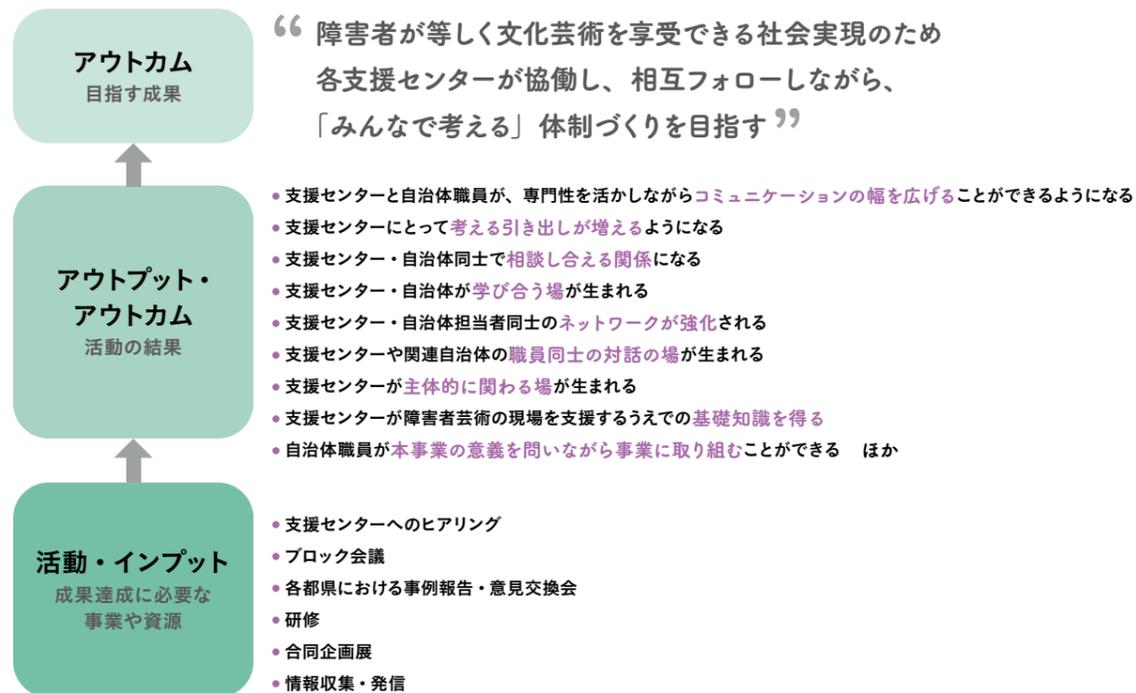
当センターがスタートした2021年度から、事業の指標とプロセスが適正であったかを客観的に振り返るため、第三者による評価チームを設置しています。評価の方法としては「伴走型の評価体制」を採用。事業の最終報告だけを評価するのではなく、当センターに計画段階から振り返りまでを伴走する形で事業のプロセスを把握し、対話しながら評価を進める体制として長津結一郎氏（九州大学准教授）と藤原顕太氏（一般社団法人ベンチ）にご協力いただきました。



評価方法

——ロジックモデルを活用した目標設定と事業計画

今年度も目指したいことを整理し、それにもとづいて評価尺度（下図）を活用。広域センターとしての「アウトカム（目指す成果）」は、2021年度、2022年度に続いて同じものを採用し、それに伴う「アウトプット・アウトカム（活動の結果）」と「活動・インプット（成果達成に必要な事業や資源）」を設定しています。年度後半には、支援センター向け・自治体向け・広域センター向けにそれぞれ作成したアンケート調査を行い、ロジックモデルと照らし合わせました。



アンケートとロジックモデル

アンケート調査（p. 43）による回答をもとに、ロジックモデル（目標）に対する達成度を算出して表にしました（p. 44）。目標を達成した数値には表に色をつけています。

アンケート項目 ※（ ）内の文言は自治体向けのアンケートで使用

アンケートについて

- 2023年12月に実施しました。
- アンケートは、支援センター向け（Q1～3、Q5～12）、自治体向け（Q1～2、Q4、Q6～12）、広域センター向け（Q13～23）にそれぞれ作成しています。
- 回答は、支援センター担当者7名、自治体担当者6名、広域センターについては自己チェックリストで回答しました。
- Q1～9、Q17～23については「非常にそう思う」「ややそう思う」「どちらでもない」「ややそう思わない」「全くそう思わない」の5段階で回答。Q10～16についてはチェックリストを作成し、チェックが付いた数に応じた評価を行いました。

- Q1 ご自身の（ご自身の自治体が設置している）支援センターの年度当初の課題はどれくらい解決されたと思いますか。
- Q2 広域センターや他の支援センターが頼れる存在であると思いますか。
- Q3 ご自身の支援センターは、自治体職員と、専門性を活かしながらコミュニケーションの幅を広げていると思いますか。
- Q4 自治体職員が支援センターと、専門性を活かしながらコミュニケーションの幅を広げていると思いますか。
- Q5 広域センターの事業を通じて、支援センターが考える引き出しが増えたと思いますか。
- Q6 他の支援センターと（他の支援センターやブロック内の他の自治体と）お互いに相談をし合える関係にあると思いますか。
- Q7 今年度の活動の幅は、前年度と比べて広がったと思いますか。
- Q8 合同企画展は、ご自身の支援センターや自治体が持つ活動のニーズを満たしていると思いますか。
- Q9 広域センターからの助言や個別の支援を通じて、支援センター（自治体）の活動がより良くなったと感じますか。
- Q10 研修会／ブロック会議／自治体事例報告／合同企画展について、あてはまるものをチェックをしてください（チェック項目はそれぞれ3つずつ）。
- Q11 支援センター（自治体）同士のネットワークの状況について、あてはまるものをチェックしてください（チェック項目は7つ）。
- Q12 支援センターの認知度について、あてはまるものをチェックしてください（チェック項目は4つ）。
- Q13 支援センターや関連自治体の職員同士の対話の場が生まれるための活動について、あてはまるものをチェックしてください（チェック項目は5つ）。
- Q14 支援センターが主体的に関わる場が生まれるための活動について、あてはまるものをチェックしてください（チェック項目は4つ）。
- Q15 支援センターが障害者芸術の現場を支援するうえでの基礎知識を得るための活動について、あてはまるものをチェックしてください（チェック項目は6つ）。
- Q16 自治体職員が本事業の意義を問いながら事業に取り組むことができるための活動について、あてはまるものをチェックしてください（チェック項目は6つ）。
- Q17 今年度の活動の中で、支援センター同士が他の支援センターの事業を体験し合うことが起こっていたと感じますか。
- Q18 今年度実施した自治体へのアプローチは、支援センター単体ではカバーできないものでしたか。
- Q19 今年度実施した合同企画展は、支援センター単体では取り組むことが難しかった発表の場であったといえますか。
- Q20 支援センターの認知度が向上するための好事例は他の支援センターに共有されていますか。
- Q21 支援センターの特徴的な取り組みは広域センターのウェブサイトで広報されていますか。
- Q22 支援センターや広域センターのウェブサイト最新の情報が掲載されていますか。
- Q23 支援センターや広域センターの事業がメディアに取り上げられるという実感がありますか。

目標と達成度

表の見方

- 事業当初に作成した「目標」に対し、アンケートをもとに集計しています。
- アンケートの設問が5段階のものは5.0を最高値にし、平均値を算出。チェックリストで回答したものについては、項目中の選択数に応じて算出。

■ 目標を達成

| アウトカム | 目標 | アンケート | 達成目標 | 支援センター (n=7) | 自治体 (n=6) | 広域センター (n=1) | 評価尺度 | |
|----------|--|-------|------|--------------|-----------|--------------|------|-------------------------|
| 最終アウトカム | 各支援センターが協働し、相互フォローしながら、「みんなで考える」体制づくりを目指す | Q1 | 3.5 | 3.57 | 3.50 | | 5段階 | |
| | | Q2 | 4.0 | 4.57 | 4.67 | | | |
| 中間アウトカム | 支援センターが自治体職員と、専門性を活かしながらコミュニケーションの幅を広げることができるようになる | Q3 | 4.5 | 4.43 | | | | |
| | 自治体職員が支援センターと、専門性を活かしながらコミュニケーションの幅を広げることができるようになる | Q4 | 3.5 | | 4.33 | | | |
| | 支援センターにとって考える引き出しが増えるようになる | Q5 | 4.0 | 4.71 | | | | |
| | 支援センター同士で相談し合える関係になる | Q6 | 4.0 | 4.29 | 4.17 | | | |
| | 支援センターや自治体が前年よりも活動の幅が広がる | Q7 | 4.0 | 4.14 | 3.83 | | | |
| 初期アウトカム2 | 発表の場があることを通じて個々の支援センターの活動ニーズが満たされる | Q8 | 4.0 | 4.71 | 4.50 | | | |
| | 支援センターの支援の質が上がる | Q9 | 4.0 | 4.43 | | | | |
| | 他の自治体の状況を知ることで自治体における支援体制が充実する | Q9 | 4.0 | | 4.17 | | | |
| | 支援センター・自治体が学び合う場が生まれる | Q10 | 4.0 | 3.86 | 3.33 | | | |
| | 支援センター担当者同士のネットワークが強化される | Q11 | 4.0 | 4.71 | 2.83 | | | |
| 初期アウトカム1 | 支援センターの認知度が向上しているという実感が生まれる | Q12 | 4.0 | 4.29 | 2.33 | | | チェックが 数に応じた項目の 配点 |
| | 支援センターや関連自治体の職員同士の対話の場が生まれる | Q13 | 4.0 | | | 5.0 | | |
| | 支援センターが主体的に関わる場が生まれる | Q14 | 4.0 | | | 4.0 | | |
| | 支援センターが障害者芸術の現場を支援するうえでの基礎知識を得る | Q15 | 4.0 | | | 2.0 | | |
| | 自治体職員が本事業の意義を問いつつ事業に取り組むことができる | Q16 | 4.0 | | | 4.0 | | |
| | 他の支援センターの事業を体験することができる | Q17 | 4.0 | | | 4.0 | | |
| | 支援センターだけではカバーできない自治体へのアプローチが行われる | Q18 | 4.0 | | | 5.0 | | |
| | 支援センター単体では従来取り組むことができなかった発表の場が生まれる | Q19 | 4.0 | | | 5.0 | | |
| | 支援センターの認知度向上のためのグッドプラクティスが共有できるようになる | Q20 | 4.0 | | | 2.0 | | |
| | 支援センターの特徴的な取り組みが広域センターのウェブサイトに蓄積される | Q21 | 4.0 | | | 5.0 | | |
| 5段階 | 支援センターや広域センターのウェブサイトに最新の情報が掲載されて注目されている | Q22 | 4.0 | | | 3.0 | | |
| | 支援センターや広域センターの事業がメディアに取り上げられる | Q23 | 4.0 | | | 2.0 | | |

※アウトカム……活動を行うことにより達成が目標される成果

自由記述の回答から

アンケートにて、自由記述欄に記載された内容を一部抜粋して紹介します。

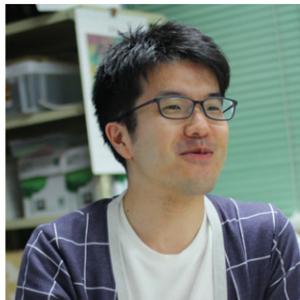
広域ブロック内のネットワークについての意見・感想があれば記述してください。

- 同じブロックのセンターには、ブロック会議以外でも相談に乗っていただいている。当センターは、後発で設置されて日が浅いので、わからないことは他センターから意見を聞き、どのように事業を行っているのか確認できるのでありがたい。(支援センター)
- 広域センターにも、他支援センターにも、困った際にはご相談させていただきありがたいと思っている。それぞれのセンターで特色ある取り組みをなさっていること、自治体との連携についても参考にさせていただいている。しかしながらやはり別組織であり、予算感も違うため、助け合えるとまではいかない。(支援センター)
- 相談対応など、困りごとを日常的にやりとりできる関係になっています。他センターの考え方や取り組みを知ることが、よりよい関係につながると思うので、引き続き情報交換や事例報告ができるといいと思います。また、広域センターのウェブサイトで紹介されている全国の公募展・イベント情報が参考になっています。今後も更新を続けてほしいです。(支援センター)
- 連携の機会はあまりありませんでしたが、取り組みはとても参考になるものばかりでした。(支援センター)
- 他県とつながりを持つことはあまり多くないため、広域ブロックでの活動は、ネットワークを築く貴重な場となっていると感じている。(自治体)
- 本年度、本県の文化芸術関係事業の拡大や見直しのため、電話等での聞き取りにより、ブロック内(外)の他の自治体で行っている取り組みの事例や予算措置状況を教えていただく機会が数多くあり、大変参考になった。(自治体)
- 自治体同士の横の繋がりという点では、まだ頻りに連絡を取り合うような関係性ではないが、Zoom等で顔を合わせているので、以前に比べ相談しやすい環境にはなっていると思います。(自治体)

広域センターの取り組みについて、気づいたこと、今後期待することなどがあれば自由にご記入ください。

- 研修について、専門的に知識を得られる機会があるとよいと思う。今年度のような各県の実施事例などの紹介ももちろんとても重要だが、特定の条件や環境が大きく影響する部分も多いため、研修の内容としては、各支援センターが共通して運営に活かしていける専門知識や情報を得る研修が必要だと感じる。(支援センター)
- 当センターの知りたい情報等を、調べて教えていただいたり、意見交換や勉強を行う場を設けていただいたり、大変助かっています。(支援センター)
- 我々支援センターが予算の問題等で行えない事業や取り組みに、支援センタースタッフだけでなく、当県の一般の方も参加できる機会をつくっていただけるとありがたいと思う。(支援センター)
- 各センターの意見を取り入れながら事業を考えていただいていると思います。交流企画になかなか参加できなかったのですが、研修のなかでも他センターを見に行く機会がもっとあればと思いました。(支援センター)
- 合同作品展等にかぎらず、支援センター同士が一緒に作業などをする場はとても貴重だと思いました。ブロック内で共通目標や課題を設けてそれらを1年かけて各支援センターがそれぞれの取り組みに組み込んでいき成果を報告し合うのもよいかと思いました。(支援センター)
- 他自治体の具体的な活動内容を知る機会はなかなかないので、毎年行っていたりしている各自治体の事例紹介についてはぜひ今後も続けていただきたい。(自治体)
- 毎回、課題となっているテーマを題材として研修会等を開催していただき、ありがとうございます。研修会やブロック会議、合同企画展等が、知識を身に付ける機会になるとともに、他の支援センターや自治体の方々との交流・コミュニケーションの場になることにより、新たな取り組みが生まれる可能性もあると思います。(自治体)

評価チームによるコメント



長津結一郎

ながつ・ゆういちろう

多様な関係性が生まれる芸術の場に伴走／伴奏する研究者。専門はアーツ・マネジメント、文化政策。障害のある人などの多様な背景を持つ人々の表現活動に着目した研究を行っているほか、音楽実技やワークショップに関する教育、演劇・ダンス分野のマネジメントやプロデュースにも関わる。現在、九州大学大学院芸術工学研究院准教授。2013年東京藝術大学大学院博士後期課程修了、博士（学術・東京藝術大学）。著書に『舞台の上の障害者：境界から生まれる表現』（単著、九州大学出版会、2018年）、『アートマネジメントと社会包摂』（共編著、水曜社、2021年）など。日本文化政策学会理事、文化経済学会（日本）理事、日本アートマネジメント学会運営委員。

毎年、年度当初に広域センターとの協議により事業目標を設定し、年度終わりにその点検を行う、という評価のサイクルを回し始めて、今年度で3年目となった。この1年間は特に、個々の支援センターや自治体に対する中間支援としての広域センターの役割が、題目だけでなく徐々に血が通ってゆくことを実感した。

広域センターの今年度の事業では、アンケートの内容を拝見する限りは、総じて手応えのある活動になっており、なかでも考える引き出しが増えたり、支援センターや自治体が相互に専門性を生かしたコミュニケーションができるようになったり、相談し合える関係ができてきているようだった。

一方、支援センターや自治体の学び合い、自治体間のネットワークの構築にはまだ課題が残されているようである。支援センターの認知度に関しては、支援センターは手応えを感じる一方で、自

治体は必ずしもそう思っておらず、認識が大きく異なるようであった。

今後に向けては、相談しあえる関係性が昨年度から継続しているという強みを活かしつつ、支援センターの認知度を向上させる取り組みや、ネットワークをさらに強固なものにしていく取り組みの検討、さらには個々の支援センターや自治体の活動がより良くなるようなブロック会議や研修会のテーマを検討することが求められるだろう。

ここで採用している評価手法は第三者評価とは異なり、実施者の手応えをもとにした自己評価に近いものである。事業の改善と変革に向けて、より良い事業のあり方を構想する一助となることを目指した関わり方を私自身も心がけているし、今後は「変革」をいとわず、さらに広域センターとして機能を広げる活動に展開していくことを期待している。



藤原顕太

ふじわら・けんた

舞台芸術制作者、社会福祉士。日本社会事業大学卒業後に舞台芸術界に入り、舞台芸術制作者に向けた中間支援の仕事に就く。2017年より福祉と芸術に関わる仕事を始め、障害のある人の芸術活動支援に携わる。2021年、アートマネージャーによるコレクティブ「一般社団法人ベンチ」を設立し、理事に就任。埼玉県東松山市の高齢者福祉施設にアーティストが滞在するプロジェクト「クロスプレイ東松山」や、アクセシビリティ・コーディネートなどの事業を行っている。NPO法人 Explat 副理事長。

アートセンター集が南関東・甲信ブロックの広域センターを担ってから3年目となるが、地域内の連携構築という点では、これまでの2年間で培ってきたものが芽を出した年となったのではないだろうか。プロジェクトに伴走するなかでそのように感じられた理由の一つとして、ブロック内の各支援センターと広域センターの間で、ヒアリング等を通じての意見交換する回数・内容が拡充したことが挙げられる。非常にシンプルなことだが、相談できる関係性が醸成されたからこそ率直に意見交換する機会が増え、意見をもらうことによって広域センターからの支援がより良いものになっていくという、良い流れが生まれつつあるように見受けられる。

また意見交換会や研修でも、参加者同士がグループにわかれて意見交換する機会が多く設けられた。なかでも特に印象的だったのは、支援センターの人々が講師を務めた研修だ。講師自身がどのよう

な価値観を大事に思って仕事をしているのかを語ることで、ほかの参加者たちも、自身の専門性や価値観を基盤にした対話の場が生まれていたように思われた。

このような取り組みの甲斐あってか、ブロック内の支援センター同士で、困ったときに相談する事例が増えている。個人対個人の信頼関係が基盤となることで、ブロックが単なる行政的な区分での制度にとどまらず、参加者にとって有意義なネットワークとして機能しつつあることが伺えるのではないだろうか。

目指すべき次の課題は、各支援センターと自治体の連携のあり方に対する支援だろう。両者が、互いの長所を活かした取り組みを行うためには、組織レベルでの相互理解を進める必要がある。そのときこそ、ネットワークでの議論の蓄積が生きてくるのではないだろうか。

おわりに

コロナ禍でスタートした当センターの活動は、さまざまな活動が制限される状況のなかで試行錯誤を重ねてきました。昨年度からようやく対面での会議も行えるようになり、オンラインでは難しい交流の機会がなくなりました。今年度は、各センターと自治体の情報交換をこれまで以上に充実させることで、さらに連携を深められるよう注力しました。活動において、各支援センターや自治体の課題やニーズをすくい上げることが大切だと考えています。そのなかで、初年度から継続している外部専門家が関わった評価チームの存在は心強く、事業の方向性を見極める大きな柱となっています。毎年、年度初めに事業内容と目標を見直すことで、一つひとつの事業の役割を整理することができ、それを広域センター内でも共有することでスタッフ同士も目標を確認する機会になっています。広域センターを運営して3年目となりますが、継続して事業評価に取り組んだことで、課題やニーズだけでなくこのブロックの特色が明確になり、広域センターとしての在り方も考える契機になっています。芸術文化活動の成果や評価の難しさを実感しながらも、より多くの方にこの事業の魅力を伝えられるよう、事業評価で得た成果も本事業の価値の一つとして、発信していきたいと考えています。

今後も、「広域センターとして」という視点だけでなく、私たちも支援センターの一つとして、各支援センターや自治体の方々と向き合いながら事業に取り組んでいきたいと思えます。

最後になりましたが本事業の実施にあたり、ご協力いただいた皆様に心より感謝申し上げます。

南関東・甲信障害者アートサポートセンター

Each Center

南関東・甲信ブロック 支援センター一覧

埼玉県・基幹型

埼玉県障害者芸術文化活動支援センター アートセンター集

実施団体 社会福祉法人みぬま福祉会 所在地 〒333-0831 埼玉県川口市木曾呂1445 工房集内
TEL 048-290-7355 FAX 048-290-7356 E-mail artcenter@kobo-syu.com
URL https://artcenter-syu.com/



埼玉県・特色型

ART(s)さいほく

実施団体 社会福祉法人昂 所在地 〒355-0077 埼玉県東松山市上唐子1532-5 まちこうばGROOVIN' 内
TEL FAX 0493-81-4597 E-mail arts_saihoku@subaru-swc.com
URL https://www.subaru-swc.com/~groovin/



千葉県

千葉アール・ブリュットセンター うみのもり

実施団体 株式会社いろだま 所在地 〒299-4301 千葉県長生郡一宮町一宮2553-8
TEL FAX 0475-36-7411 E-mail info@uminomori.net
URL https://uminomori.net/



東京都

東京アートサポートセンターRights (ライツ)

実施団体 社会福祉法人愛成会 所在地 〒164-0002 東京都中野区上高田3-38-5 太和屋産業ビル2階
TEL 03-5942-7251 FAX 03-5942-7252 E-mail rights@aisei.or.jp
URL https://rights-tokyo.com/



神奈川県

神奈川県障がい者芸術文化活動支援センター

実施団体 認定NPO法人S T スポット横浜 所在地 〒220-0004 神奈川県横浜市西区北幸1-11-15 横浜STビル地下1階
TEL 045-325-0410 FAX 045-325-0414 E-mail info@k-welfare.org
URL https://k-welfare.org/



山梨県

YAN 山梨アール・ブリュットネットワークセンター

実施団体 社会福祉法人ハヶ岳名水会 所在地 〒408-0025 山梨県北杜市長坂町長坂下条1237-3
TEL 0551-45-7027 FAX 0551-45-8221 E-mail yan@y-meisui.or.jp
URL http://y-meisui.or.jp/yan/



長野県

ザワメキサポートセンター (長野県障がい者芸術文化活動支援センター)

実施団体 社会福祉法人長野県社会福祉事業団 所在地 〒381-0034 長野県長野市大字高田364-1 (長野県社会福祉事業団 本部事務局内)
TEL 026-217-0022 FAX 026-228-0310 E-mail art@nagano-swc.com
URL https://nagano-swc.com/



表紙絵＝野口敏久(工房集)
扉絵・似顔絵＝関 翔平(工房集)

ART SUPPORT CENTER

南関東・甲信
障害者アートサポートセンター
2023年度事業報告書



2024年3月31日発行

企画・発行 社会福祉法人みぬま福祉会
南関東・甲信障害者アートサポートセンター
〒333-0831 埼玉県川口市木曾呂 1445 (工房集内)
Tel: 048-290-7355 / E-mail: artcenter@kobo-syu.com

編集 工房集
制作 佐藤恵美
執筆協力 彌田円賀 (p.28～33)
デザイン 宮外麻周 [m-nina]
センターロゴデザイン PORT
撮影 鈴木広一郎、長崎剛志、武藤奈緒美、工房集
助成 令和5年度障害者芸術文化活動普及支援事業(厚生労働省)

© 社会福祉法人みぬま福祉会
無断転載・複写を禁じます。

南関東・甲信障害者アートサポートセンター
<https://skk-support.com>

南関東・甲信
障害者アート
サポートセンター



社会福祉法人
みぬま福祉会

